

# しまねの道徳

道徳教育郷土資料

中学校

島根県教育委員会



|   |    |
|---|----|
| 道徳の授業は……                                | 2  |
| 1 語りこそわが人生<br>話芸の神様 徳川夢声                | 3  |
| 2 島で学ぶ<br>隠岐島前高等学校生徒の話                  | 9  |
| 3 百メートルは一生の友<br>「暁の超特急」 吉岡隆徳            | 15 |
| 4 道づくりにかける<br>断魚溪を愛した学者 野田慎             | 21 |
| 5 離島医療の仕事はおもしろいで<br>白石吉彦さん（隠岐島前病院院長）に聞く | 27 |
| 6 松江城を国宝に<br>市民に愛される城                   | 33 |
| 7 響け 江川太鼓<br>復興から今へ、そして未来へ              | 39 |
| 8 「平和を」と祈り続けて<br>永井隆博士が命をかけて伝えたこと       | 45 |
| 9 赦し難きを赦す<br>世界の平和を求め続けた画家 加納亮菫         | 51 |
| 10 ドコーン ドコーン<br>魂の和太鼓奏者 今福優さん           | 57 |
| 11 ネット将棋                                | 63 |
| 12 言葉の向こうに                              | 67 |

# 道徳の授業は……

■ お話を読んで、自分らしい考えやよりよい生き方を見つけよう

## 自分を生かす



### 自分で考える

11 ネット将棋

### 自分らしさ

- 1 語りこそわが人生
- 2 島で学ぶ

### 目標に向かって

- 3 百メートルは一生の友
- 4 道づくりにかける

## 社会で生きる



### 働くこと

5 離島医療の仕事はおもしろい

### ふるさとを愛する

- 6 松江城を国宝に
- 7 響け 江川太鼓

### 世界に生きる

- 8 「平和を」と  
祈り続けて
- 9 赦し難きを赦す

## ともに生きる



### いろいろな考え

12 言葉の向こうに

## 生命を愛おしむ



### よりよく生きる

10 ドコーン ドコーン

■ 話し合いを通して、より魅力的な人をめざして成長しよう

1. 登場人物の考えや行いについて、  
自分の考えをしっかりと。

～について、  
私はこう思う。



5. 自分の考えやよりよい  
生き方を見つめよう。

自分の考えには、  
～という点が  
足りなかったな。

～のような  
考え方って  
すてきだな。



## 話し合いを深める 5つのポイント

2. 自分の考えを発表したり  
書いたりしよう。

私は、  
～のように  
考えます。



3. クラスメートの考えを  
聞いて、自分の考えと  
比べてみよう。

Aさんの考えは、  
私の考えと同じだ。

Bさんの考えは、  
私の考えと違うな。



4. 話し合いをしながら自分の考えを  
膨らまそう。

Bさんの考えを、  
もう少し詳しく  
聞かせてください。

Aさんの考えに  
加えて、私は  
～だと思えます。



# 1 語りこそわが人生

話芸の神様

徳川夢声 とくがわむせい



徳川夢声さん

## 徳川夢声さんについて

- 明治27 (1894) 年 みの 美濃郡益田町 (今の益田市) に生まれる。
- 大正2 (1913) 年 さい 19歳 ふくはられいせん 福原霊川として活弁士の活動を始める。
- 大正4 (1915) 年 21歳 徳川夢声に改名。
- 昭和8 (1933) 年 39歳 活弁士をやめ、俳優や脚本家として活躍。
- 昭和14 (1939) 年 45歳 ラジオドラマ「宮本武蔵」が始まる。
- 昭和25 (1950) 年 56歳 第1回「放送文化賞」受賞。
- 昭和46 (1971) 年 77歳でなくなる。



「小次郎っ。負けたり。」

「なにっ。」

「今日の試合は、すでに勝負があった。なんじの負けと見えたぞ。」  
昭和十四（一九三九）年に放送された、ラジオドラマ「宮本武蔵」の一場面です。あなたなら、このセリフをどう表現しますか。

昭和の中ごろ、その語りで人気を博した人がいます。その人こそ、益田市が生んだ「話芸の神様」、徳川夢声です。

夢声は本名を福原駿雄といい、明治二十七（一八九四）年、益田町折戸（今の益田市本町）で生まれました。すぐに津和野に移り住み、さらに、四歳のときに東京で生活するようになりました。

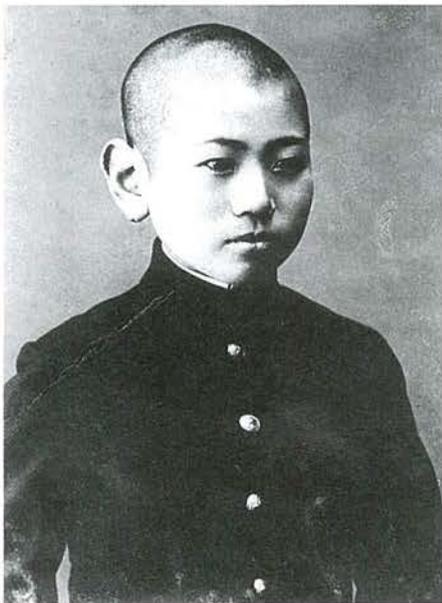
駿雄は、幼いころからおしゃべりが達者でした。雨の日には、教室に友達を集めて、大好きな落語を披露しました。覚えたものをそのまま語るのではなく、誰にでもわかるように、内容や語り口調を変えるなど、工夫をしました。そんな駿雄の落語は学校中で評判になり、独演会を開くほどでした。

（人前でしゃべることっておもしろいなあ。）

駿雄は落語家に憧れをもつようになりました。

「どうだ、活弁士という仕事がある。お前に合っていると思うぞ。やってみんか。」

十九歳になった駿雄は、父の勧めもあって、活弁士の見習



13歳の頃

いとして入門することになりました。活弁士の仕事は、明治から昭和初期にはやった音声のない無声映画で、スクリーン横に立ち、映像に合わせて内容を説明したりセリフをつけたりするものです。写真も珍しかった時代に唯一、映像を見て楽しめたのが、活動写真とも呼ばれた無声映画でした。多くの人々が集まる映画館で、活弁士は欠かせない存在でした。

駿雄は「福原靈川」という名前を付けてもらい、映画館の舞台に立つことになりました。「なかなかよかったぞ。」

客席から大きな拍手と歓声が上がったデビューの日を、駿雄は一生忘れることはありませんでした。

その後、駿雄はあちこちの舞台に立って、自分の芸に磨きをかけていきました。そして、二十一歳のときに「徳川夢声」と改名します。「徳川」は契約していた映画館の名前が「葵館」で、葵が徳川家の紋章であることから、「夢声」は夢のある活弁士になってほしいという願いを込めて、映画館の人たちに付けてもらった名前でした。以来、仕事は大変順調で、夢声は一気に人気活弁士になりました。



活弁士時代

しかし、昭和に入ってから、夢声の人生に大きな転機が訪れます。トーキーの登場です。映像に音声や音楽がついた現在のような映画であるトーキーには、活弁士が不要だったのです。

三十九歳のとき、夢声は活弁士の職を失いました。悔しい気持ちやこれからの生活に不安な気持ちでいっぱいでした。

(なんでこんなことに……。)

何日も苦しみ悩む日々が続きました。そんなとき、小学生のころ、自分の落語を聴いて喜んでいた友達の顔が浮かんできました。

「あのころは、うまくしゃべりたいと思って、がむしゃらに話し方の勉強をしていたな……。」

夢声は、近所の人が余興で落語をするのを毎日見に行つて必死に暗記したことや、落語の本を片手に、どうしたら人を喜ばせる話し方ができるか考えていたことを思い出しました。

「やはり、俺には語ることにしかない。話術によって人を感動に導く。これしかないんだ。」  
もう迷いはありませんでした。

それからというもの、夢声は話術を鍛えるために、多方面で働き始めます。俳優として舞台に立ったり、映画に出たり、本を書いたりするなど、いろいろな仕事をこなしました。そんなとき、ラジオで「宮本武蔵」の朗読をしてほしいと依頼がきました。

「これまで長い時間をかけて身につけてきた自分の話術を發揮する絶好の場だ。」

夢声はますますやる気を出し、朗読に自分なりの工夫をしました。「宮本武蔵」の朗読で特徴的だったのは、夢声の独特の「間」でした。例えば、脚本の「はてな」。耳を澄ました。どこかで」のところを、「耳を澄ました。」を削除して、「はてな。」——「どこかで」と語るので。ラジオで沈黙が長く続いてはいけなと考える人が多いなかで、夢声は削除した部分に長い沈黙の「間」を置いて、聴



ラジオ番組の生放送で話す



晩年のころの夢声

いている人に、武蔵が耳を澄ます動作を想像させました。

この夢声ならではの語りは大変好評で、人々は手に汗を握り、夢中になってラジオから流れる声に耳を傾けました。こうした工夫のいかいもあって、「宮本武蔵」は何年も続く人気番組となり、夢声の生涯の仕事となりました。

あるとき、「宮本武蔵」を毎回聞いているという音楽家と夢声が対談することがありました。そこで夢声が番組の感想を尋ねると、「話し方の勉強になる。君にしかできない芸だね。」

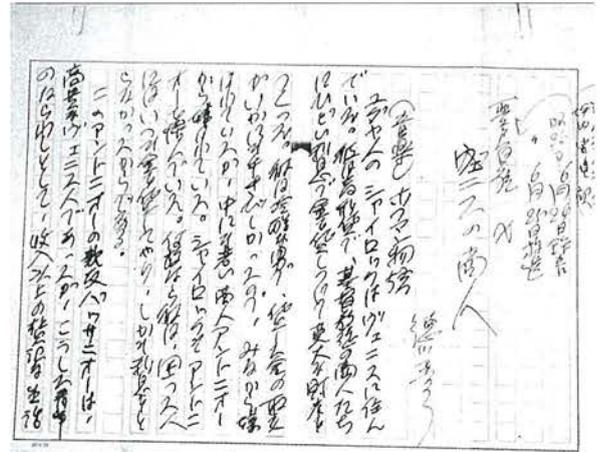
という答えが返ってきました。夢声は少し驚いて、照れたような笑みを浮かべました。

夢声は、その後も個性のある語り手として、ラジオやテレビなどで活躍しました。その語りは、子どものころからこだわり、何度も練習して完成させたものでした。

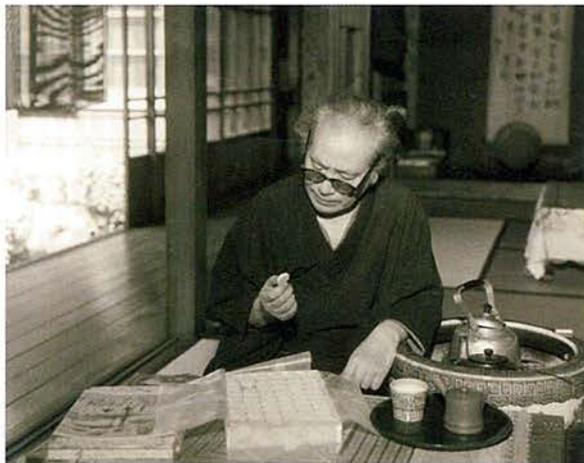
晩年、多方面で才能を開花させた夢声は、「話芸の神様」と呼ばれるようになりました。



①ラジオドラマ「宮本武蔵」が収録されているレコード（益田市立歴史民俗資料館蔵）



②ラジオ番組「夢声百夜」の直筆原稿



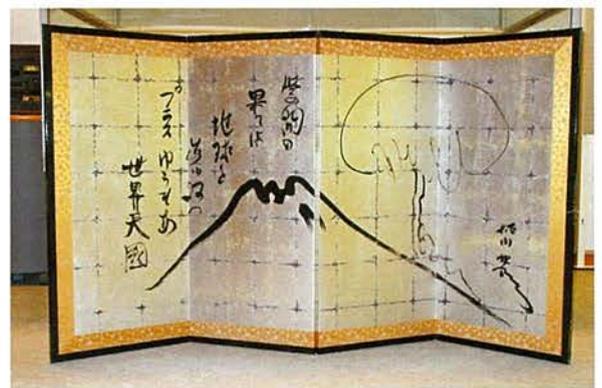
③作家として執筆活動を行う



④益田市立吉田小学校講堂で講演する（昭和30年ごろ）



⑤クリスマスパーティーでスピーチをする



⑥ゆうもあくらぶ主催の展示会で、夢声が出品した屏風（益田市立歴史民俗資料館蔵）

# 2 島で学ぶ

## おきとうぜん 隠岐島前高等学校生徒の話



ヒトツナギツアーで参加者を迎える島前高校生

「夢探究」を校外でプレゼンテーションする様子



### 隠岐島前高等学校について

- 昭和30 (1955) 年 県立隠岐高等学校島前分校として開校。
- 昭和40 (1965) 年 県立隠岐島前高等学校 (普通科各学年2クラス) となる。
- 平成20 (2008) 年 生徒数の減少で各学年1クラスになる。
- 平成22 (2010) 年 島前高校魅力化プロジェクト (島留学など) 始まる。
- 平成23 (2011) 年 ヒトツナギ部始まる。
- 平成26 (2014) 年 生徒が増え、全学年2クラス化が実現。

あま  
海士町



松江市にある七類港からフェリーでおよそ三時間、日本海に浮かぶ隠岐諸島の海士町に県立隠岐島前高等学校（島前高校）があります。この学校は、全国各地から生徒を受け入れる「島留学」という珍しい制度を実施しており、現在は百五十人を超える生徒が通っています。今回は、二人の生徒に話を聞きました。

### 県外から隠岐島前高校へ（野村世菜さんの場合）

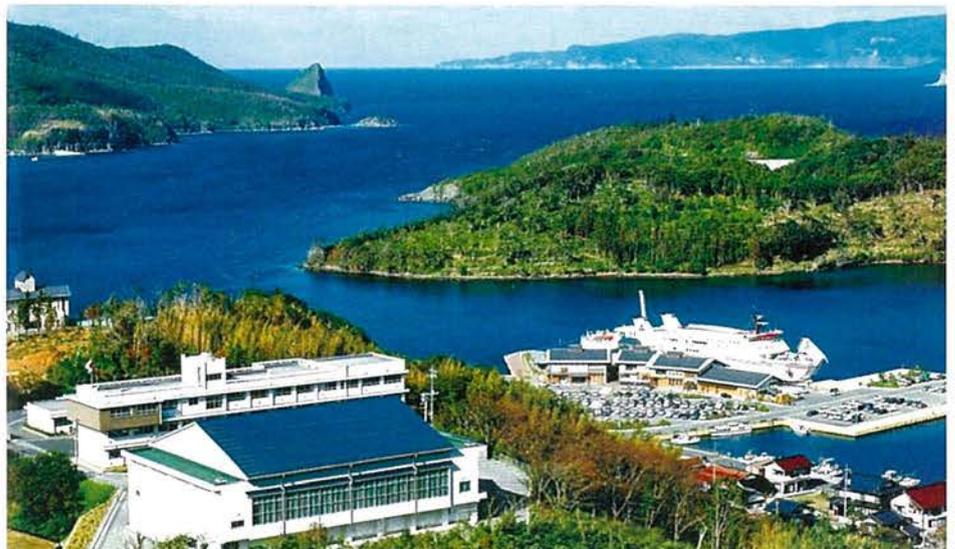
「世菜、こんな高校があるよ。人間力を高める高校だそうよ。島留学制度があるんだって。」

進路を考えていた時期に、母はテレビ番組で見た学校の話をしてくれました。

隠岐島前高等学校。福岡県に住んでいる私は、その学校に興味をもち、資料を取り寄せたりインターネットで調べたりしました。人見知りで、人と話すことを苦手とする私を、母はいつも心配していました。島前高校や島留学を知って、（ここで自分を変えてみたい。）と思ったのでした。なかでも私が興味をもったのは、「ヒトツナギツアー」でした。

夏休みに行われるヒトツナギツアーは、島前高校のヒトツナギ部が企画する五日間のイベントです。隠岐の三つの島の見学や島の生活体験をしながら、島の人たちとつながるといった内容。行ってみたいけれど、行ったことがない島や初めて会う人に不安もありました。

「島前高校ヒトツナギツアーっていうのがあってね、私、行ってみたいけど、お母さん、どう思う。」



\* ヒトツナギ部  
地域での活動を企画・  
運営する部活動。



ヒトツナギツアーの飲「芸」会（地域芸能を紹介する）で、キンニャモニャを踊る島前高校生

「行ってらっしゃい。やってみたいと思うなら挑戦しなくちゃ。大丈夫、大丈夫。」

母の笑顔に背中を押されてヒトツナギツアーへの参加を決め、中学最後の夏休みに、初めて海士を訪れました。

「福岡から来た野村世菜です。」

ドキドキしながら話す私に、ヒトツナギ部の先輩は、笑顔で話しかけてくれました。

「こちらこそよろしく。」

その日は、指示された人や場所を探す「指令探検」という活動をしました。

「この海士は、なんにもないけど、いいところだよ。」

私をサポートしてくれた先輩が教えてくれました。胸を張って誇らしげに言う先輩が格好良く見え、私の中のホームステイや隠岐に伝わる芸能「キンニャモニャ」を踊ったことなど、貴重な経験は私の宝になりました。あつという間の五日間でした。

翌年の四月。念願がかなって島前高校に入学した私は、ヒトツナギ部に入部しました。人と話すことが苦手だったのがうそのようです。苦手だと思っていることにあえて向き合うことができるようになります。そして、それは私のよさとなりました。そんなことを、自信をもって言えるようになりました。

人と話すって楽しい。人と人がつながることってすばらしい。

（インタビューに基づき作成）



部活動報告の新聞を定期的に発行し、町の人が集まる場所に掲示している

島で育つて（沼田啓佑さんの場合）

僕は、中学生のころ、先生や友達に推薦されて、学園祭などさまざまな活動のリーダーをすることがありました。

「頑張ったな。啓佑のリーダー、よかったぞ。」

みんなほめてくれましたが、自分の意見や思いを友達にしっかり伝えることに自信がなくて、そんな僕がリーダーをしてよかったのか、わからずにいました。

進路を決める時期になると、担任の先生との面談で、僕は島前高校への進学を勧められました。高校入学と同時に島から出る友達もいますが、海士出身の僕は、家から通う高校生活のほうが安心に思えました。そのころすでに、島前高校は周りから注目される学校になっていました。

晴れて島前高校に入学。高校生活が始まりました。入学者の半分は島留学制度による生徒です。

（目的をちゃんともって入学しているし、言いたいことはしっかり話す……。ちよつと話しづらいな。）

島留学生と距離を感じました。

高校の授業では、特に「夢探究」という総合的な学習の時間が、僕を大きく変えました。「夢探究」は、地域の課題を見つけ、解決策を考え、現実的に実践できることをグループの仲間と議論し、調べて発表するという内容です。僕のグループは、「Uターン増加のために何が必要か」という課題に取り組みました。もちろん島留学生もグループの一員です。

あるとき、なかなか話し合いが続かず、僕は、誰かが発言してくれるのを待ってい



ました。すると、

「島の上を知らんからじゃないかと僕は思うけど、啓佑、どう思う。」  
グループの一人が僕に投げかけました。

「そうかもしれない。……きっと、そうだ。」

僕は、とっさに答えましたが、今まで人に頼たよっていた自分が恥はずかしくなりました。

それからです。僕が積極的に発言するようになったのは。

「地域のことがかかるようになったのは、高校生になってからだなあ。」

「……ってことは、小さいころからの教育が大切ってこと。」

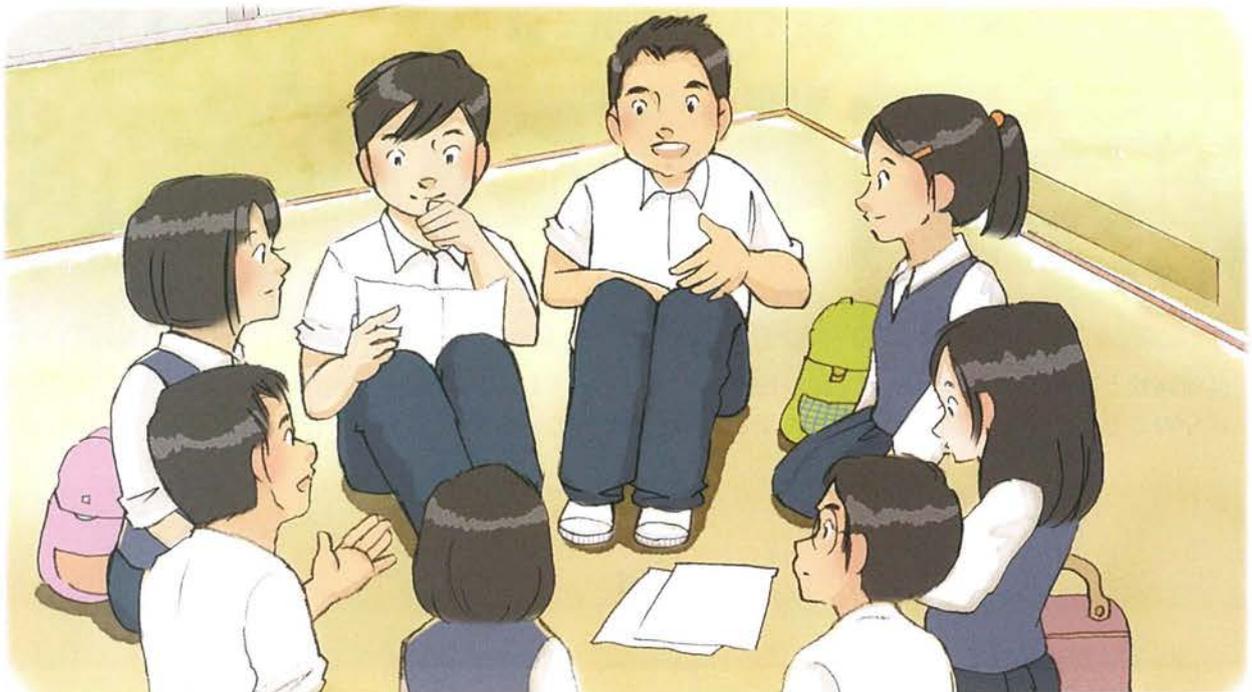
「それだけでは解決せんでしょ。」

入学当時に感じた距離感を忘れて、島育ちの僕たちと島留学生たちは、活発に意見を交えました。異なる意見を受け入れて考え、さらに自分の意見をきちんと伝えることが、グループでの活動を活発にし、人をまとめる上で大切なことだと学びました。

その後、僕は生徒会長になりました。人から言われてではなく、自分からなりたいたと思ったのです。目的に向かって動くこと、人の意見を聞きながら自分の思いを伝えて行動すること、そして周りをまとめることのおもしろさを、今、感じています。それが僕の強みです。

自分のよさを伸ばすのも伸ばさないのも自分次第しだい。

(インタビューに基づき作成)



## 地域と密着した多彩な行事とカリキュラム



|                                |                     |   |                         |   |                       |  |  |                    |   |                    |                                |
|--------------------------------|---------------------|---|-------------------------|---|-----------------------|--|--|--------------------|---|--------------------|--------------------------------|
| 4月<br>始業式<br>入学式<br>期進式<br>入学式 | 5月<br>生徒総会<br>PTA総会 | 6月<br>新高校野球<br>PTA地区3校総会<br>地区大会<br>運動部総会 | 7月<br>学園祭<br>音楽祭<br>体育祭 | 8月<br>ヒートアップ<br>全国高校野球<br>大会大学レスリング<br>強化育成<br>大会 | 9月<br>運動部総会<br>地区体育大会 | 10月<br>学校コンクニヤ<br>生徒総会<br>大学音楽祭<br>運動部総会<br>(祝日閉校) | 11月<br>最新高校教育の日<br>運動部総会<br>(チニスレスタング) | 12月<br>生徒大会<br>新年式 | 1月<br>始業式<br>運動部総会<br>(バレーボール・<br>バスケットボール) | 2月<br>運動部大会<br>生徒会 | 3月<br>卒業式<br>生徒大会<br>体育祭<br>旅行 |
|--------------------------------|---------------------|---|-------------------------|---|-----------------------|--|--|--------------------|---|--------------------|--------------------------------|



### まちづくりを実践する「地域学」

「地域学」は高知地域を中心とした、地域住民のみなさんとの密着した学びです。生徒たちが地域の課題解決に取り組む中で、その過程を通してコミュニケーションの力を伸ばし、社会貢献活動を行います。授業では各校の特色に基づいたプロジェクトを中心とした学習を進めています。平成29年度は「海上防衛の第一歩」をテーマに、知事公邸で防衛省との連携授業を行いました。また、地域住民との交流も積極的に行っています。



### 自分の力を試せる高校

ヒトツナギスタッフ

私たちが目指しているのは、高校3年生までには、自分の力を試せるような環境を作ることです。そのためには、自分の意見が認められる環境が必要です。先生と生徒との関係は、互いに尊重し合える関係です。また、先生と生徒との関係は、互いに尊重し合える関係です。また、先生と生徒との関係は、互いに尊重し合える関係です。



### 隠岐島前高校からのメッセージ

#### 「自分」が見つかる高校

在校生



私は、高校生活の多彩なカリキュラムと、先生との密着した学びが、自分を見つけることができました。ここでは、自分自身の力を試せるような環境があります。また、先生と生徒との関係は、互いに尊重し合える関係です。また、先生と生徒との関係は、互いに尊重し合える関係です。

#### 本気で向き合える高校

卒業生



高校生活は、自分自身の力を試せるような環境があります。また、先生と生徒との関係は、互いに尊重し合える関係です。また、先生と生徒との関係は、互いに尊重し合える関係です。

①学校案内。この案内を見て興味をもつ中学生も多い。



②「夢探究」（総合的な学習の時間）では、「人間関係づくり」「高校時代を考える」「仕事を考える」「地域に学ぶ」「自分と地域をつなぐ」などのテーマで探究している。



③島前高校と連携している公立塾「隠岐国学習センター」では、「夢ゼミ」の学習がある。「夢ゼミ」では、自分のことについて、例えば将来どんなことをしたいかなどを考えて、話し合う。

# 3 百メートルは一生の友

「暁の超特急」

吉岡隆徳



吉岡隆徳さん

## 吉岡隆徳さんについて

- 明治42（1909）年 簸川郡西浜村（今の出雲市湖陵町）に生まれる。
- 大正9（1920）年 西浜尋常小学校5年生のとき、学校代表で競技会に初めて出場する。
- 大正12（1923）年 杵築中学校（今の大社高等学校）で、陸上部と柔道部に入部する。
- 昭和2（1927）年 近畿中等学校選手権（今のインターハイ）に出場し、100m・200mで優勝する。
- 昭和7（1932）年 ロサンゼルスオリンピック100mで6位入賞。「暁の超特急」と呼ばれる。
- 昭和10（1935）年 当時の世界タイ記録（10秒3）を達成する。
- 昭和11（1936）年 ベルリンオリンピック100mに出場する。
- 昭和39（1964）年 リッカーミシンの陸上部監督として、教え子を東京オリンピックに送る。
- 昭和57（1982）年 くにびき国体（島根県）開会式で集団演技（小学生の陸上教室も）に参加。
- 昭和59（1984）年 74歳でなくなる。

いづも  
出雲市



オリンピック陸上競技の百メートル決勝で、見事に入賞した日本人がただ一人います（平成二十七年現在）。知っていますか。

彼の名は、吉岡隆徳。明治時代の終わりに簸川郡西浜村（今の出雲市湖陵町）に生まれ、昭和時代初期に活躍した陸上選手です。隆徳は、昭和七（一九三二）年にアメリカ合衆国で開催されたロサンゼルスオリンピックの百メートル決勝に進出し、見事六位入賞を果たしました。また、昭和十年、二十五歳のときに、百メートルで、当時の世界タイ記録である十秒三を達成しました。

タツ、タツ、タツ、タツ……。

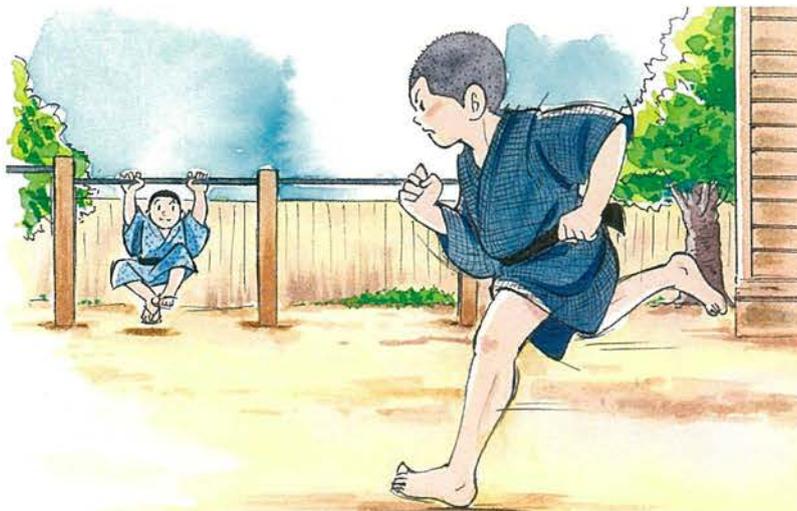
西浜村の小学校の校庭に軽快な足音が響きます。五年生だった隆徳は、夏休み中も校庭で短距離走の練習をしていました。一年生のときに運動会で、校長先生に、「かけっこがとても速いんだね。」

とほめられてから、隆徳は走るのが大好きになっていました。その隆徳の姿を、三年生の田所信博が鉄棒にぶら下がりながら熱心に見ていました。

信博は左足が不自由でした。そして、いつもひとりぼっちでした。「四人組」と呼ばれる上級生のいじめっ子たちが信博をいじめているのを何度も見かけましたが、隆徳は怖くて何も言えずにいました。

ある日、四人組が信博の着物を脱がせようとしていました。信博が嫌がって抵抗する様子に気づいた隆徳の耳に、父の声が聞こえてきたのです。

（いじめは相手や周りの者を傷つけるだけではない。いじめた当人の心もすさんでしまう。自分より小さくて弱い者をいじめるのは、人間として最低のことなのだ。）





隆徳は、四人組に向かって走り出していました。

「やめろ。やめろってば、やめろよ。」

四人組に逆らう恐怖を忘れ、ただ夢中で声を上げたのでした。

そして、四人組とかけっこで勝負をして自分が勝てばいじめをやめると約束させ、隆徳が勝って、信博へのいじめをやめさせました。信博は隆徳に感謝し、その後、二人は親しくなりました。

当時の隆徳は、少しでも速く走れるようになるために、「走って、走って、走りぬく」という練習をしていました。そんな姿に、あるとき信博が、

「走っているばかりで、僕のように腕の力をつけようとしないなだね。」と、少し冷ややかに言いました。

「なんだと。えらそうに言うな。」

悔しまぎれに叫ぶ隆徳に、信博は落ち着いた声で言いました。

「じゃ、逆上がりの勝負をしようよ。」

早速二人は鉄棒にぶら下がりました。

「せいのおっ。」

同時に回転し始めたところ、三回転で腕が動かなくなった隆徳でしたが、信博は目にもとまらぬ速さで、何十回も軽やかに回るではありませんか。勝負が決まると、信博は、

「手も足も、脳が動けと命令しているんだ。どちらかだけではダメなんだ。だから、今の隆徳は足の動かない僕と変わらないんだよ。」

隆徳はハッとしました。そして、走るばかりだった練習法を見直しました。

「ぼくの練習法は、あのときのことかヒントになっているのです。」  
と、後年、隆徳は述べています。

隆徳は、杵築中学校（今の大社高校）に入学して本格的に陸上に取り組みようになりました。肉体的にも精神的にも大きく成長した中学時代に、もっと陸上に打ち込みたい、という気持ちが強くなりました。

成長した隆徳は、「五年間、みっちり陸上に打ち込むぞ」という固い決意をもって、東京高等師範学校（今の筑波大学）に進みました。しかし、寮生活や軍事訓練などで忙しくて練習する時間がとれないうえに練習場所もお金の余裕もなく、陸上を続けたくて進学した隆徳は、後悔しました。

（日本の代表としてオリンピックで走りたい。）

夢を実現させるために、隆徳は生活のすべてを百メートル走にささげることになりました。

まず、朝早く起きて練習時間を確保しました。先輩のおかげで借りられることになったグラウンドへ行くときには、ただ歩くのではなく、信号が青に変わる瞬間に体が動くようにしたり、左足前のスタートの姿勢を右足前に替えてみたりしました。そういった練習内容や生活時間（起床や就寝など）、食事、体調の変化（体重や便通など）を克明に記録し、細かく分析して練習の改良を重ねました。

また、身長百六十五センチメートルという隆徳の小柄な体格をカバーするた





め、スタートダッシュにこだわりました。やがて、低い姿勢から左右の足を「ハ」の字の形に蹴り出す「ハの字形スタート」という独特のスタート法を身につけましたが、これは日々の努力と工夫を重ねた結果でした。

そしてついに、隆徳はオリンピック日本代表選手となります。夢にまで見たオリンピック。その百メートル準決勝で、隆徳は二位に入るすばらしい走りを見せました。続く決勝では、六位に終わったものの、スタートから六十メートル地点まではトップを走るとい内容でした。

六位ではありましたが、直後に四方八方から「ヨシオカ」「ヨシオカ」と隆徳を呼ぶ声が聞こえてきました。スタンド全体が、優勝したアメリカ人ではなく、隆徳の精いっぱいへの走りに感動したのです。

やがて、隆徳は「暁の超特急」と呼ばれるようになりました。オリンピックの取材をした日本人記者が、隆徳のすさまじいばかりのスタートダッシュを見て、命名したのでした。

自己ベストの十秒三を出した昭和十(一九三五)年から七年後、三十二歳になっても隆徳はベストタイム更新をめざして精いっぱい練習を続けました。そして、現役引退後は指導者として選手の育成に努める一方で、百メートルをいつまで、どの程度のタイムで走ることができるかという自分の限界を追求しました。

「私にとって、百メートルは一生の友です。歳をとったからといって、この友と別れるわけにはいきません。」

「暁の超特急」と呼ばれた隆徳は、百メートルに生涯をかけた人でした。



①生まれ故郷の湖陵総合運動公園にある、隆徳の銅像。平成13年につくられた。



②「努力」は隆徳が好きな言葉。「力」の字のまっすぐ伸びる部分は、100メートルと、一筋の道を進む思いを表している。  
(春日貴紘氏 所蔵)

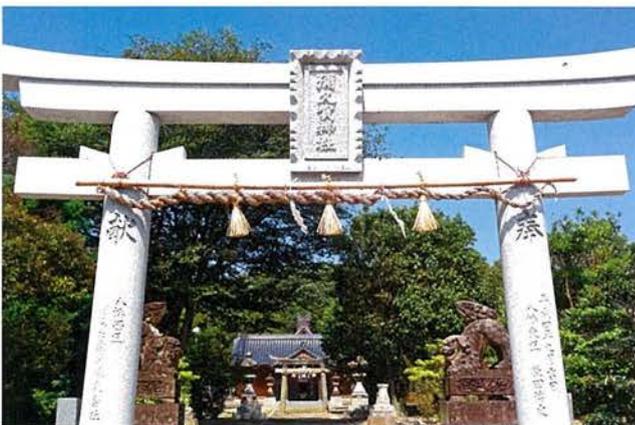
隆徳の100メートルの年齢別記録  
(年齢は各年4月1日現在)

※は追い風参考記録

| 年(西暦) | 年齢(歳) | 記録    |
|-------|-------|-------|
| 1923  | 13    | 12秒6  |
| 1924  | 14    | 12秒0  |
| 1925  | 15    | 11秒6  |
| 1926  | 16    | 11秒4  |
| 1927  | 17    | 11秒1  |
| 1928  | 18    | 11秒0  |
| 1929  | 19    | 10秒9  |
| 1930  | 20    | 10秒7  |
| 1931  | 21    | 10秒5  |
| 1932  | 22    | 10秒6  |
| 1933  | 23    | 10秒4  |
| 1934  | 24    | 10秒5  |
| 1935  | 25    | 10秒3  |
| 1936  | 26    | 10秒4  |
| 1937  | 27    | 10秒2※ |
| 1938  | 28    | 10秒4  |
| 1939  | 29    | 10秒7  |
| 1940  | 30    | 10秒6  |
| 1950  | 40    | 11秒4  |
| 1965  | 55    | 12秒5  |
| 1970  | 60    | 13秒2  |
| 1978  | 68    | 15秒0  |
| 1980  | 70    | 15秒1  |



③隆徳が使用したユニフォームとオリンピック入賞記念に贈られたカップ。(松江歴史館 所蔵)



④出雲市湖陵町にある彌久賀神社。隆徳は、この神社の神官の四男として生まれた。周辺は西浜いも(さつまいも)の栽培で有名で、砂丘となだらかな丘が続く。隆徳はこの砂丘を走って脚力を鍛えた。

# 4

## 道づくりにかける

断魚溪を愛した学者

野田

慎



断魚溪の  
春の風景



断魚溪を観光する人々

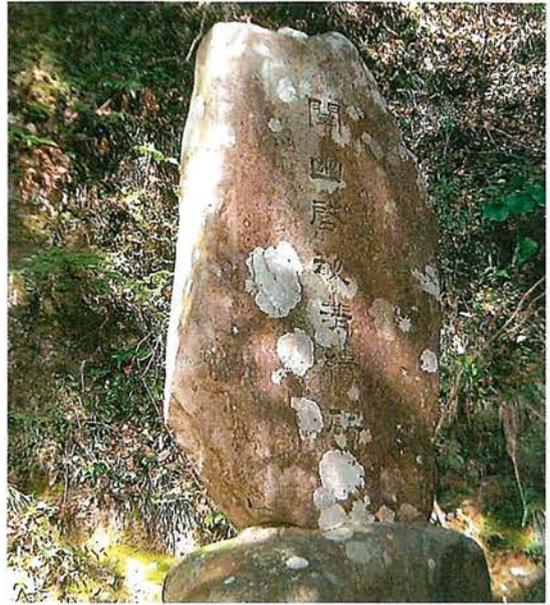
### 野田 慎について

- 天保15 (1844) 年 井原村野原谷 (今の邑智郡邑南町井原) に生まれる。幼名は岡次郎と  
いった。
- 慶応3 (1867) 年 井原に私塾「汲古館」を開き、多数の門弟を育成する。
- 明治8 (1875) 年 道づくりのための運動を始め、県議会や知事に陳情する。
- 明治17 (1884) 年 岩山を削り、道づくりを始める。
- 明治21 (1888) 年 『断魚溪題詠集』を作り、宣伝の旅に出る。
- 明治32 (1899) 年 夏に病気でなくなる (55歳)。この年の秋、断魚溪に新道が完成する。

おおなん  
邑南町



野田慎の功績をたたえる石碑



邑智郡邑南町井原に、県立自然公園「断魚溪」<sup>おうち おおなん いばら だんぎよけい</sup>があります。断魚溪は、切り立った岩壁の間を江の川の支流、濁川が流れ、迫力ある岩や崖に囲まれた自然の美しい溪谷です。新緑や紅葉の頃をはじめ、四季を通じて多くの観光客が訪れます。

断魚溪に古い石碑が建てられています。断魚溪を愛した漢学者、野田慎の功績をたたえたものです。石碑には、次のような文が刻まれています。

「この世にまたとないよい景色である断魚溪は、野田という人によって初めて世の中に知らされました。野田の名前は慎といい、別名、断魚溪人と名乗っていました。よく勉強し、立派な人格をもつ人でした。そのため、勉強を教えてもらいにくる人がたくさんいました。……」（原文をやさしくしたもの）

野田慎は、天保十五（一八四四）年、鉄山業を営む野田家の四男として生まれました。若くして漢学者になった慎は、私塾「汲古館」を開いて多くの塾生を育てました。

時代が明治に変わり、鉄が外国から輸入されるようになると、鉄の価格が下がって、野田家をはじめ、村人の多くが携わっている鉄山業の経営は苦しくなりました。慎は、村のこれからの発展を願い、ある決意をして塾生たちに話しました。

\*1 漢学  
特に江戸時代において、  
中国から伝来した学問  
の総称。

\*2 鉄山業  
山から鉄鉱石を掘り出  
し、鉄を製造する仕事。  
\*3 私塾  
江戸時代の日本におけ  
る民間の教育機関。

「私たちが住むこの井原は、とてもいいところですよ。一方、ここには険しい山道しかなくて、隣の町へ馬車で行くこともできず、とても不便です。私は、地元の発展のために、断魚溪の岩山を削って馬車道をつくろうと思います。馬車道があれば便利になるし、何より町の自慢である美しい断魚溪に、たくさんの人に来てもらうこともできます。」

慎の一大決心を聞いた塾生たちは、驚きました。

「先生、あの岩山を削るなんて、できるのですか。」

断魚溪は約四キロメートルにもわたって断崖絶壁が続いており、馬車道をつくるには険しい岩山を削るしかありません。しかも、まだ便利な機械がない時代です。自分たちの手で削るほかありません。尊敬する先生の言葉であっても、そのようなことができるのは、誰も想像ができませんでした。

この決意を聞いた村の人々も、塾生と同じ反応でした。

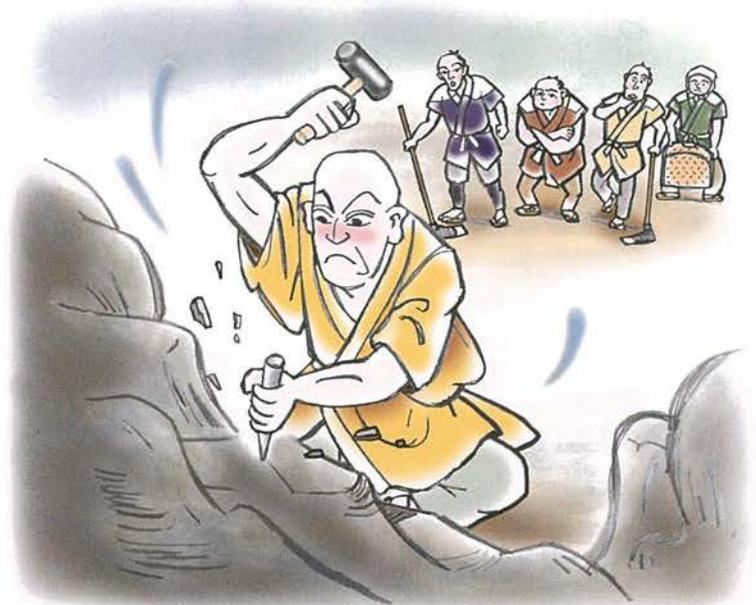
「そんな大がかりな工事をするお金も人も、この村にはないぞ。」

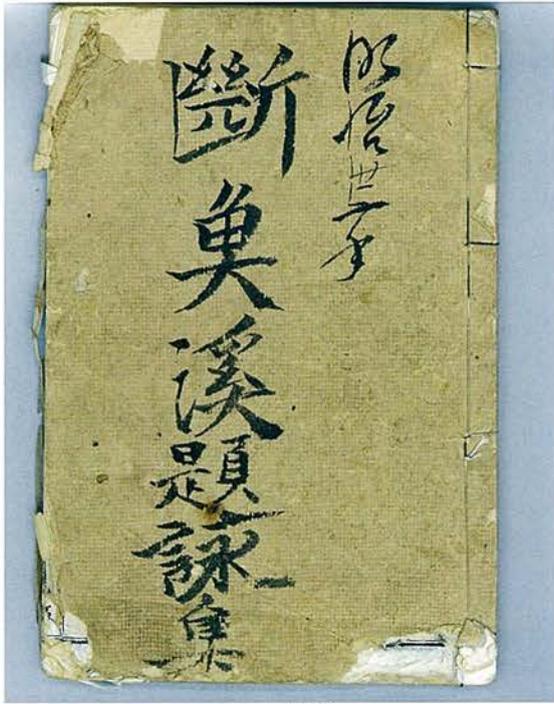
「慎さんは、いったい何を考えているんだ。」

地元の人々の理解が得られないなか、慎は県議会に何度も資金援助を求めに行きましたが、受け入れてもらうことができませんでした。それでも、慎は諦めませんでした。

「県からの協力を待っているのは先に進めない。とにかく作業を始めよう。」

明治十七（一八八四）年、岩山を自らの手で削る馬車道建設を、自費で始めることにしました。





『断魚溪題詠集』には、<sup>おおち</sup>邑智郡内だけでなく、全国各地の文人が集まった和歌、俳句が収められている。

ある日、県知事の籠手田安定が川本村（現在の川本町）にやってくることを聞きつけた慎は、知事に断魚溪を案内することを申し出て、約束を取りつけることに成功しました。そして、断魚溪を案内しながら、慎は知事に村の発展や馬車道の必要性を語りました。

「断魚溪は本当に美しい。あなたの志もよくわかった。ぜひ資金援助をしたいが、私だけの考えではできない。地元の人と一緒に申請を出しなさい。そのためにも、まずは断魚溪のすばらしさをもっと多くの人に宣伝して、協力者を増やす努力をしなさい。」知事からアドバイスを得た慎は、さっそく動き出しました。建設作業を続ける一方で、断魚溪の景色の中からえりすぐった二十四の景色一つ一つに、和歌や俳句を作ってくれよう、近隣の村々や全国の有名な文人に頼んでまわりました。そして数年後、集まった作品をまとめた『断魚溪題詠集』を出版しました。さらに慎は、自ら描いた断魚溪山水絵図や染め抜きの手ぬぐい、有名人に書いてもらった俳句を印刷した絵短冊（現在のパンフレット）などを作り、全国に宣伝の旅に出ました。

決意したことにたった一人でひたむきに取り組む慎の姿に、地元の人々の思いも少しずつ変わりました。



断魚開発組合のみなさん

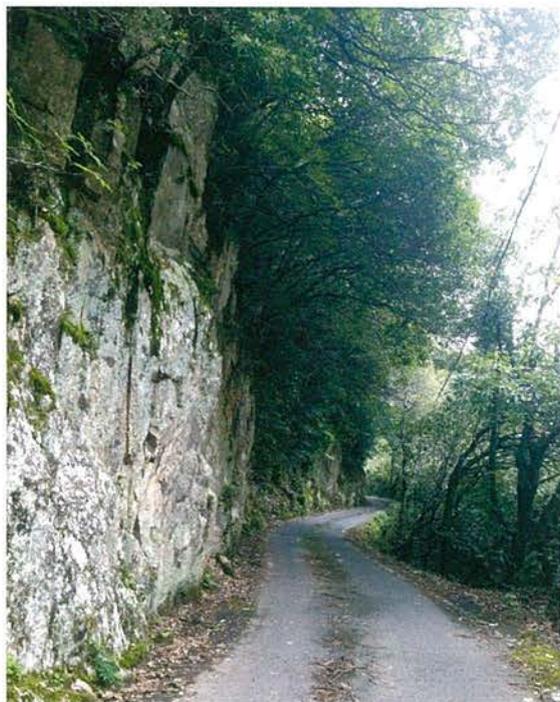
「慎さんは、村の将来を本気で考えている。」  
慎の努力が実り、ついに井原村や近隣の村々の代表者と連名で、県事に補助金申請を出すことができました。申請は認められ、県から得た資金で、建設作業を続けることができました。

建設作業開始から十五年たった明治三十二（一八九九）年の夏、長年の心労が重なって自宅で倒れた慎は、五十五歳の生涯を終えました。慎が生涯をかけて建設をめざした馬車道は、その年の秋、見事に開通しました。慎の思いに共感し、断魚溪のすばらしさを広めてくれた人たちのおかげも

あって、地域には多くの観光客が訪れるようになりました。やがて、慎が建設した馬車道は県道になり、断魚溪には料亭や温泉宿もできて、一層にぎわうようになったのでした。

現在、井原地区には国道が通り、多くの観光客が断魚溪を訪れています。平成八（一九九六）年に地元住民は「断魚開発組合」を設立し、断魚溪の保全と観光開発、地域の小学生の見学会案内などに取り組んでいます。地元住民に愛され、全国各地から観光客が訪れる断魚溪を、慎はどんな気持ちで見ているでしょうか。

野田慎の馬車道をもとにつくられた県道。  
左側の岩壁は、当時手で削られたもの



「断魚溪二十四景」より

蓑腰 みのこし



蓑腰に 残るさぎりのややはれて  
涼しくわたる 松風のおと

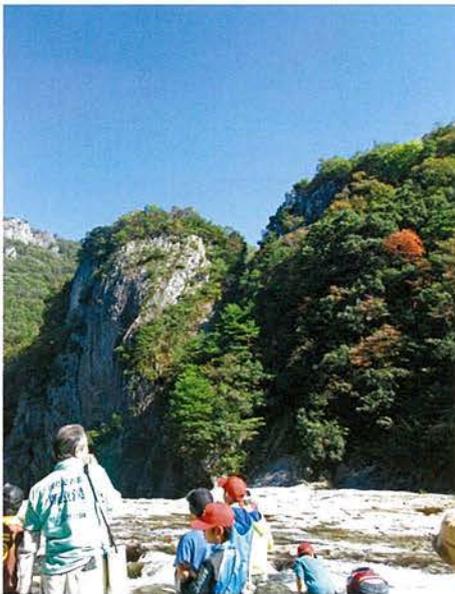
野田 慎

背は鼓 うつと聞こえて 神楽淵  
いつも立舞ふ 水のうたかた

野田 慎



神楽淵 かぐらぶち



美しい景色を楽しむ観光客。

地元の小学校では、断魚開発組合の方の案内で毎年、4年生が社会科見学をしながら、野田慎について学習する。

# 5

## 離島医療の仕事はおもしろいぞ

白石吉彦さん (隠岐島前病院院長) に聞く



島前の美しい自然

釣りを楽しむ

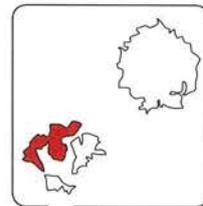


医師として働く

### 白石吉彦さんについて

- 昭和41 (1966) 年 徳島県に生まれる。
- 平成4 (1992) 年 自治医科大学卒業。  
徳島県立三好病院・日野谷診療所に勤務。
- 平成10 (1998) 年 島根県隠岐郡西ノ島町にある島前診療所に勤務。
- 平成13 (2001) 年 隠岐広域連合立隠岐島前病院初代院長に就任。

西ノ島町





「海がいいか。それとも山がいいか。」

島根県で仕事をするようになったときに聞かれたんです。それまで山の中にある診療所しんりょうじょに勤めていたので、

「『山』の次は『海』にしますかね。」

と答えました。そして、平成十年四月から、隠岐おきの西ノ島町にしノしまにある島前診療所とうぜんに勤めることが決まりました。島には最低一年いればいい、と言われたこともあって軽い気持ちでした。

初めて来た隠岐は、海や絶景などの自然やおいしい海の幸に恵まれ、島の人はいい人ばかり。まずは一年、同じ医者である妻と、ここで頑張ろうと思ったものです。

そんな毎日が始まってふた月ほどたったある日、

「吉田よしださんが自宅で寝たきりになったぞ。」

と教えられました。吉田さんは、二週間ほど前、ひどかった肺炎えんがよくなって退院したばかり。医療いりょうの力の限界を感じるできごとでした。

（八十歳さいを超えているからといって、退院してすぐに寝たきりになるなんて、幸せとはいえん。こんなすばらしい島にいるんや、島の人たちには最期さいごまで幸せに生きてほしい。）

島の住民の四割近くが六十五歳以上の高齢者こうれいです。だから、医療者と、ヘルパーさんやデイサービスの職員かいくなどの介護を行



っているみなさんとで、協力し合うことが絶対に必要だと感じました。医療と介護がひとつになった「ケア」を実現したい。

「動くぞ、俺は。動かすぞ、島の人たちを。この島の医療者と患者、どっちも『笑顔』にするで。」

まず、定期的に会議を開くことを決め、関係者に呼びかけました。でも、第一回会議に参加したのは、私と妻だけ。役所にもかけあつたけれど、

「どうせ先生も、一、二年でこの島から出ていくんでしよう。そんな若い医者呼びかけに、人が集まるかどうか。」

と、言われました。そこで私は答えました。

「でも、せっかくここで医者をするなら、そこまでやったほうがおもしろいじゃないですか。」

その後も周りに声をかけ続けました。やがて、会議に少しずつ人が集まるようになりました。

「みんなで取り組みれば、いい仕事がおもろくできるんですよね。」  
会議で言われたこの言葉、うれしかったですね。

「その通りです。介護や医療をおもろい仕事にしましょう。」

サービス調整会議と名づけたこの会議では、ケアが必要な人全員について、情報を交換し合い、出した薬をきちんと飲んでるか確



認したり、必要に応じてケアの内容を調整したりしています。

そうするうち、西ノ島にしノしまに来て三年がたちました。あつという間でした。診療所しんりょうじよは、ベッド数を増やして病院となりました。定年退職が決まっていた所長から、初代院長になってほしいと言われ、悩んだ末に引き受けることにしたのも、院長なら、さらに仕事をおもろくできる、と考えたからでした。

当時の島前診療所とうぜんには、診療所長のほかに、外科医、小児科しょうにか医、内科医が勤務し、それぞれが自分の専門分野のみを診察していました。加えて、ほとんどの医者が一年で交代する状況じょうきょうもあり、ころころ代わる医者に患者かんじやさんが専門外の相談をするのは難しく、患者としての満足度は低かったのではないかと思います。

島前の三つの島で、病院は一つだけ。島の人たちはどんなことでもみんな、うちの病院に来ます。だからこそ、どんな患者さんでも診みることができ、院長として、そんな病院をめざしたいと思いました。

うちの病院にいる医者は、臓器別専門医ぞうきではなく全員が総合医です。どんな患者さんでも診察します。医者全員が同じ立場だから、医者どうし情報も共有できるし、休みの都合もつけやすくなりました。働きやすさが居心地いこちのよさにもなり、医師が短期間でいなくなることはなくなりました。長く勤務してもらえることは、患者さんの安心につながります。前に比べて、体で気になることはなんでも相談しやすくなり、満足度は高くなったと思っています。



それに、他に回せる病院がないせっぱ詰まった状況は、医者を速く成長させてくれるはず。事実、診察技術で国内トップレベルにある分野もあるほどです。もちろん、判断や治療が難しく、専門医に紹介することもありますけど。

狭い島だから、治療後の患者さんの様子を見続けられて、それも勉強になりますね。

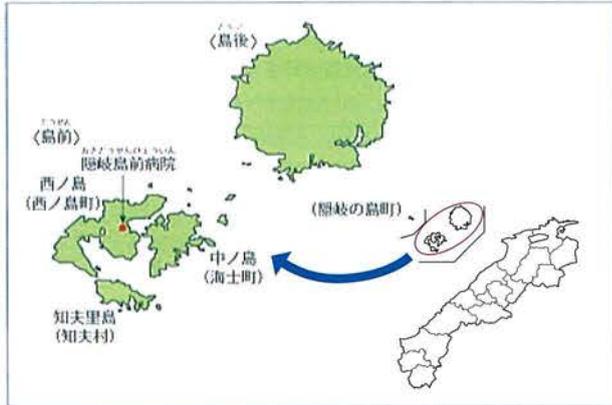
大きな町では、そうはいきません。この島だからできること。それも、病院のスタッフはもちろん、介護する人、される人みんなが積極的に関わっているからこそできることなのです。私たち病院のスタッフは、おかげで、明るく楽しくそして何よりおもしろく地域医療に取り組んでいます。

治療のあとの見通しが、必ずしもいいケースばかりではないけれど、それでも患者さんや家族の方からお礼の言葉をかけてもらえます。

島民の健康をみんなで見守る魅力的な病院として少しずつ知られるようになり、今では全国から毎年百名を超える研修生がくるようになりました。研修は、地域医療の仲間を増やすことになると考え、大変だけれど積極的に研修生を受け入れています。仲間が増えれば仕事はさらにおもしろくなるはずですから。

こんなおもしろい仕事、みなさんもいかがですか。

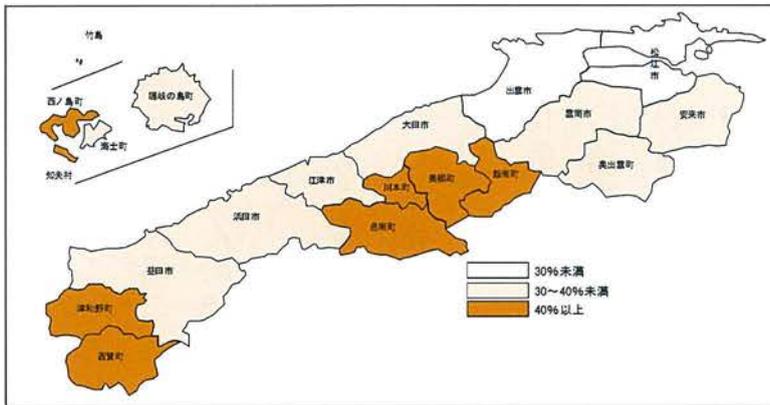
おき  
○隠岐諸島の位置



隠岐諸島は大小180余りの島からなり、そのうちの4島に人が暮らしている。西ノ島（西ノ島町3,000人）、中ノ島（海士町2,300人）、知夫里島（知夫村600人）、島後（隠岐の島町15,000人）の4島である。島後に対して、西ノ島、中ノ島、知夫里島の3島を島前と呼んでいる。島根半島から北東に約65km離れており、フェリーで約2時間半、高速船で約1時間かかる。空港があるのは島後で、島前と本土との行き来は船になる。

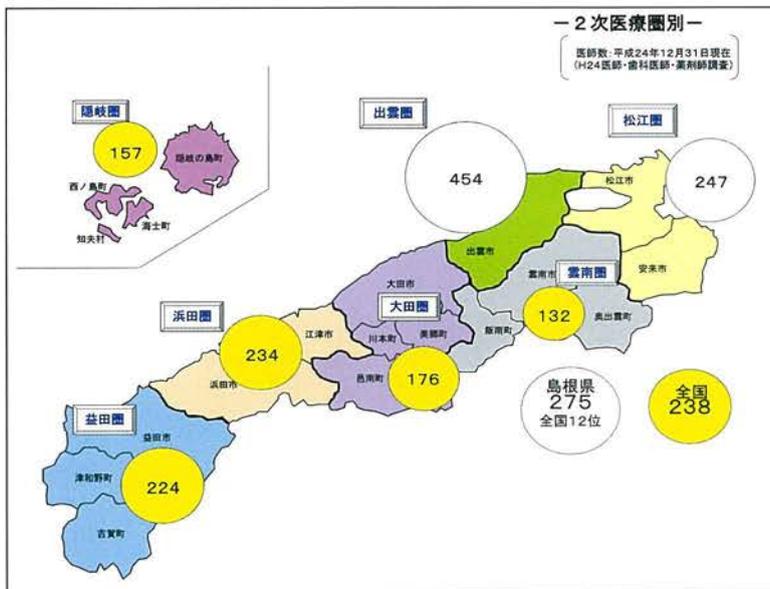
※参照：島根の統計 平成27年10月号  
島根県政策企画局統計調査課

さい  
○市町村別65歳以上人口割合



※平成26年 島根の人口移動と推計人口  
島根県政策企画局統計調査課より

へんざい  
○医師の偏在（人口10万対医師数）



2次医療圏とは、1次医療圏（市町村）、3次医療圏（県）の間の、複数の市町村のまとまりをさす。

※島根県ホームページ（健康福祉部医療政策課）より

# 6

## まつえ 松江城を国宝に 市民に愛される城



松江城

### 松江城国宝化へ向けての動き

- 昭和10 (1935) 年 松江城の天守が国宝に指定される。
- 昭和25 (1950) 年 松江城の天守が重要文化財になる。
- 昭和30 (1955) 年 松江市による国宝指定の陳情が行われる。
- 昭和34 (1959) 年 松江市議会、国宝指定推進の決議を採択する。
- 平成19 (2007) 年 松江開府400年祭が始まる (5年間)。
- 平成21 (2009) 年 松江市長、マニフェストで松江城国宝化運動を発表する。  
松江城を国宝にしよう市民の集いを開催。  
松江城を国宝にする市民の会を設立。
- 平成22 (2010) 年 市民の会による署名活動が始まる。  
松江市が松江城調査研究委員会を設置する。  
西和夫神奈川大学名誉教授を委員長とする学術調査開始。  
松江城について考える市民の集いを開催。
- 平成24 (2012) 年 松江神社で祈祷札2枚が発見される。
- 平成26 (2014) 年 文化庁による松江城天守および祈祷札の調査が行われる。
- 平成27 (2015) 年 松江城の天守が国宝に指定される。

#### 松江市





松江開府の祖・堀尾吉晴

空を飛ぶ千鳥が羽を広げた姿のように見えることから、「千鳥城」とも呼ばれる松江城。松江市にあるこの城は、豊臣秀吉らに仕えた武将、堀尾吉晴により、慶長十二（一六〇七）年から五年の歳月をかけて築城されました。松江城は、江戸時代以前に建てられた天守（城の中心的な建物）が現在まで保存されている全国十二の城のうち、二番目に広く、高さでは三番目、古さでは五番目を誇ります。歴史的に価値が高いだけでなく、長年、松江の人々から親しまれてきた町のシンボルでもあります。

平成二十七（二〇一五）年、この松江城の天守が国宝に指定されました。現存する天守として、五件目の国宝指定となります。そこに至るまでの道のりには、松江の人々の熱い思いがありました。

実は、昭和十（一九三五）年に一度、松江城は国宝に指定されたのですが、昭和二十五年に制定された文化財保護法により、国宝ではなく、「重要文化財」となりました。これを格下げと受け止めた松江市民は、国に対して松江城を再度国宝に指定するように要望を出し続けましたが、なかなか実現させることができず、しだいにその思いは下火になっていき



暴風などで傷んだ松江城（明治25～27年ごろ）



出雲市立斐川東中学校生徒が作成した紙芝居の一場面 かみしばい

ました。

それ以前に、松江城が取り壊されそうになる危機もありました。明治六（一八七三）年に政府が、全国に残る城について、残すものと壊すものに分けましたが、その際、松江城は取り壊すよう、命令が出されたのです。

しかし、松江城がなくなることに心を痛めた出雲市斐川町の豪農・勝部本右衛門栄忠、景浜親子が、旧松江藩士・高城権八とともに奔走し、自分の財産を投じて天守を買い取ったという歴史があります。

また、明治二十五年の暴風などで松江城が傷み、市民がお金を出し合って修理したこともありました。

このように、松江城は人々によって守られてきました。この美しい城は、松江で暮らす人々にとってかけがえのない存在なのです。

国宝指定へ向けての気運が再び高まったのは、松江開府四百年を迎える平成十九年ごろのことでした。

「今の松江のもとをつくってくれた堀尾吉晴公をたたえるために、何ができるだろう。」

「松江城のために、私たちが立ち上がらなければ……。」

\*1 奔走  
あちこちかけまわって、  
物事がうまく運ぶように  
努めること。



愛知県丹羽郡大口町での署名活動の様子



松江城について語る鶴鶴修一さん

\*2まつえほりお  
松江堀尾会が中心となり、平成二十一年八月、「松江城を  
国宝にしよう 市民の集い」が開催されました。その中で、  
古い建物を研究している三浦正幸さん（広島大学教授）の講  
演会がありました。

「私の講演で、会場があふれるほどの聴衆にお越しただけ  
たのは、松江城と姫路城だけです。それだけ松江城がみな  
さんに愛されているのだなと感じました。ぜひとも国宝に  
しましょう。」

松江堀尾会会長の鶴鶴修一さんは、国宝指定へ向けて活動  
するに当たって、三浦さんの言葉に強く勇気づけられました。  
そして、この活動では、松江城を愛してやまない市民の力を  
集結することが何よりも大切だと感じたのです。

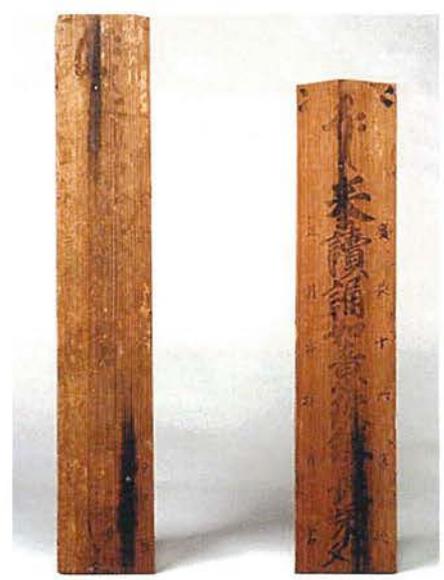
この集いをきっかけに「松江城を国宝にする市民の会」が  
立ち上がり、同じ思いをもつ多くの人たちの声を集めるため  
に、署名活動が計画されました。そして、平成二十二（二〇  
一〇）年の正月、大雪が降る中で署名活動が始まりました。

また、堀尾吉晴生誕の地として知られる愛知県丹羽郡大口  
町の堀尾史蹟顕彰会は、長年にわたって松江市と交流を続け  
ていて、この署名活動に賛同し、たくさんの署名を集めまし  
た。そうした協力もあり、およそ十か月間の活動で、十二万

\*2 松江堀尾会  
松江城の城主であった  
堀尾吉晴ら堀尾家三代  
の功績をたたえる会。



松江城国宝指定の知らせを受けて喜ぶ人たち



発見された祈祷札

八千四十四筆もの署名が集まりました。集まった署名は、同年十月、文化庁長官に届けられ、「市民の熱意はわかりました。しかし、国宝にするためには新たな知見<sup>\*3</sup>が必要です。今後は調査研究を進めてください。」という、長官の言葉が伝えられました。

そして、西和夫<sup>にしかずお</sup>さん（神奈川大学名誉教授<sup>かながわ めいよ</sup>）を中心として、松江城の学術的な調査も進められました。その結果、大規模な木造建築を可能にするための柱の工夫など、松江城に特有用な建築構造とその価値が明らかになりました。また、行方<sup>ゆくえ</sup>がわからなくなっていた<sup>\*4</sup>祈祷札の発見により、慶長十六（一六一一）年に松江城の天守が完成したことが裏付けられ、国宝指定への道が一気に開かれました。

松江城天守の国宝指定は、こうした長期にわたる多くの人の情熱と努力によって実現したのです。

国宝指定の知らせを受け、鷓鴣<sup>つばき</sup>さんは、「国宝になったからと言って、浮かれてはいられません。本当に大切なのは、これからなんです。」と語りました。松江城のこれからについても、市民みんなを考えていくのです。

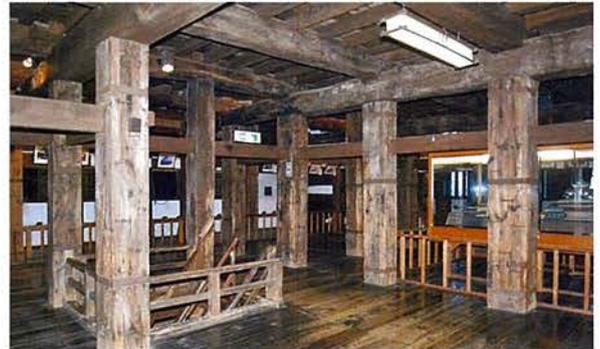
\*3 知見  
調査研究などから得た知識。

\*4 祈祷札  
建物を新築する際、災いなどを払うために祈祷したしるしの札。屋根を支える骨組みなど、建物内部に取り付けた。

松江城をはじめ、江戸時代以前に建てられて現存する天守は、日本に12のみである。松江城の天守の中に入ると、築城された当時と変わらない様子に触れることができる。



①他の城には見られない、特殊な階段。防火防腐のために桐でつくられている。



②三階の様子。二階分を貫く通し柱は、松江城の特色である。



③壁に、狭間と呼ばれる小窓が見られる。附櫓から侵入してきた敵を、天守の中から鉄砲や弓矢で撃つことができた。



④天守に井戸がつくられているのも松江城の特色で、現存天守の中では唯一。地階は、籠城に備えた生活物資の貯蔵倉庫だった。○の場所に、祈禱札が打ちつけられていた。



堀尾期松江城下町絵図  
(島根大学附属図書館 所蔵)

「堀尾期松江城下町絵図」は、堀尾氏によって17世紀初めに造られた城下町松江の様子を描いたもの。これを現在の松江市と比べると、驚くことに、松江城を中心とした街の区画や街路、堀川の配置などが、当時とほとんど変わっていないことがわかる。

このように、松江の街は400年前の姿をよく残していて、鉤型路、丁字路、筋違橋、勢溜、寺町など城下町特有の街並みを、私たちは今でも見ることができる。

松江城天守の調査・研究に取り組まれた西和夫さんは、「城下町があつての松江城なのです。お城だけでなく、城下町の歴史的な景観をこれからも大切に守っていかなければなりません。」と言われている。

未来の松江に遺す歴史的な景観とはどのようなものだろうか。松江の街を歩いて探してみよう。  
(松江城国宝化推進室)



# 7

響<sup>ひび</sup>け

江川<sup>ごうがわ</sup>太鼓<sup>だいく</sup>

復興から今へ、そして未来へ

## 江川太鼓について

- 昭和47（1972）年 大洪水により、川本町が壊滅的大打撃を受ける。
- 昭和48（1973）年 江川太鼓結成。
- 昭和53（1978）年 第1回広島フラワーフェスティバルに参加。  
第4回全国芸能太鼓祭（釧路市）に中国地区代表として出演。
- 平成2（1990）年 「島根県韓国慶尚北道姉妹提携1周年記念」韓国慶尚北道公演。
- 平成5（1993）年 バリ日本文化祭にて島根県代表としてユネスコ本部にて公演。
- 平成10（1998）年 ドイツ・フランス公演。
- 平成14（2002）年 アセム首脳会議に係る伝統芸能交流会出演（デンマーク）。
- 平成17（2005）年 デンマーク公演実施（高校生8名参加）。

かわもと  
川本町





太鼓船に湧き立つ町民

ドン ドン ドドンコ ドドンコ ドン

ドドンコ ドドンコ ドンドン ドン

太鼓をたたく若者たちを乗せた「太鼓舟」が町中を練り歩くと、体の中まで響く勇壮な音で、あたりは一気に盛り上がります。江川太鼓は、昭和四十七（一九七二）年の大洪水で町の大半が水の中に沈んだ川本町の復興を願って創られた郷土芸能で、その力強い音色は、失意の町民に勇気を与えました。

江川太鼓が初めて鳴り響いた夏祭りの日に、川本町の人々は、故郷の復興を誓い合ったのです。

島根県の中央部を流れ、日本海にそそぐ江の川は、別名「中国太郎」と呼ばれる中国地方で最長の大河です。この江の川が町の中心を流れる邑智郡川本町は、県の山間部に位置し、古くから水運によって栄えた美しい町です。

町に恵みをもたらす江の川。しかし、ときとして荒れ狂い、人々の生活に大きな被害をもたらすこともありました。川本町の人々は、幾度となくこの川に苦しめられてもきたのです。

最も大きな被害を出したのは、昭和四十七年七月に発生し、観測史上最大の洪水を記録した集中豪雨です。このとき、中国太郎は一瞬のうちに町一帯を飲み込みました。あまりにも大きな被害に、川本町は再起不能とまで言われました。



昭和四十七年の江の川の氾濫

\* 水運  
水を利用した旅客輸送・  
貨物輸送。



結成当時の江川太鼓

町の人々の多くが避難生活を強いられ、苦しい日々が続きました。自分の家に帰ることができず、泥とがれきにまみれた町の姿に、人々の心は折れかけていました。

(このままではいけない。元気な町を、もう一度取り戻さなくては……。)

ため息ばかりが聞こえる沈んだ町の中で、力強く立ち上がった若者たちがいました。多々良操さんもその一人でした。

多々良さんは、町のために何ができるのか、何をすべきなのかと悩み続けていました。失望し、疲れ果てている人たちを勇気づけたい。すべてを失ったこの町に

笑顔を取り戻すことはできないだろうか……。

今すぐにできること、誰にでもできること、そして、みんなが元気になること……。悩みに悩む多々良さんに、あるアイデアが浮かびました。

「音楽。太鼓。そうだ。」

(太鼓でみんなを元気にしたい。)

そう考えた多々良さんは、そのアイデアを町の人たちに伝えました。しかし、連日、復旧作業に追われている町の人たちは、

「こんなときに、何を言っているんだ。」

「今は、復興が最優先だ。」

と言うばかりで、なかなか理解してもらえませんでした。

(ここで諦めるわけにはいかない。)



復旧に立ち上がる被災町民

何度も何度も、多々良さんは自分の思いをたくさんの人に伝え続けました。やがて、多々良さんの熱い思いに心を動かされた人たちが少しずつ賛同を得られるようになり、同じ思いをもつ人が集まり始めました。そして、当時、高校の先生で、吹奏楽部の顧問をしていた竹内幸夫さんの協力を得られることになったのです。

多々良さんたちの思いに応えようと、竹内さんは、江川太鼓の代表曲「中国太郎」をはじめとする多くの曲を作りました。また、そのかたわら、さらに人々を元気づける方法についても考えました。

「太鼓といったらお祭りだ。」

「舟ふねを作ってタイヤに乗せ、その舟をひいて町中を練り歩く。舟の上では威勢いせいのいい太鼓の演奏が繰り広げられる。そんな『太鼓舟』を作ろう。」

想像しただけで心が震ふるえるほどすばらしいアイデアですが、多々良さんたちは、

（そんなことができるだろうか……。）

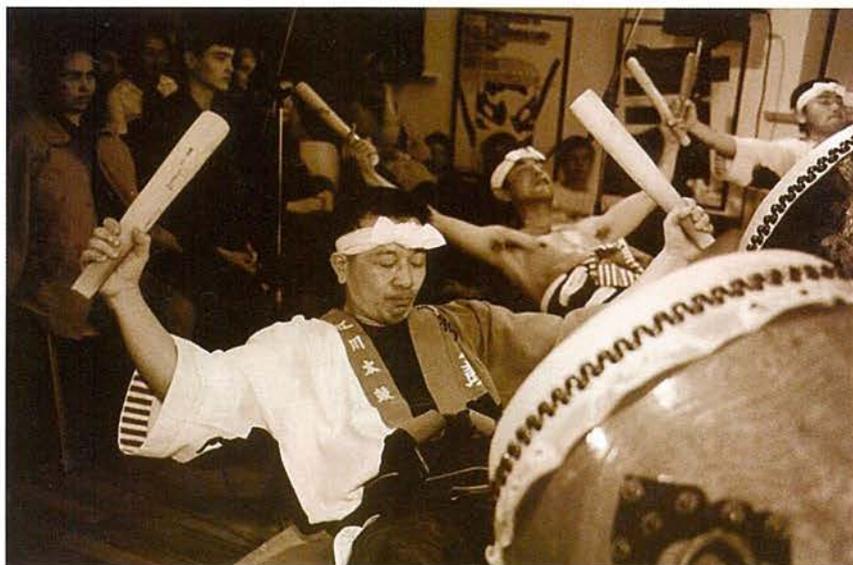
と、不安になりました。しかし、

（今はとにかく、やるしかない。）

と自分たちに言い聞かせて、準備に取りかかりました。

太鼓の練習も舟づくりも、何から何まで自分たちでやらなければならず、苦勞の連続でした。肝心かんじんの太鼓がそろわないときは、代わりに段ボールをたたいて練習を続けました。

（太鼓の音を響ひびかせたい。町の人たちを元気にしたい。）





海外交流の様子

くじけそうなきには、みんなで思いを確かめ合い、心を奮ふるい立たせました。

やがてこの思いが人から人へと伝わり、町の人の協力が少しずつ得られるようになりました。そして、ついに「太鼓舟」が練り歩く夏祭りの日を迎むかえることができました。

子どもをかく含む若者たちが懸命けんめいになって太鼓をたたき姿、力強く響きわたる音に、人々は心を打たれました。町は、その日を境に復興を加速させていったのです。

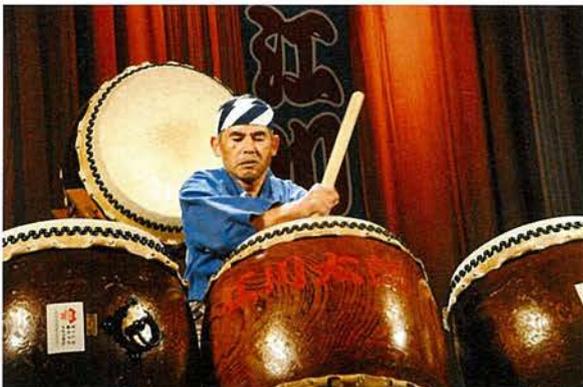
現在、江川太鼓は、川本町かわもとはもとより全国各地で公演し、海外でも交流活動をするなど、世界各地でその名を広めています。郷土芸能を通じた交流は、活力に満ちた地域づくりの大きな力になっていったのです。

結成当時からばちを握にぎり続け、現在はチームリーダーを務めている岩野賢のまのさんは、平成二十四（二〇一三）年の四十周年記念講演で次のように語りました。

「節目は通過点の一つ。新たな伝統として後世に引き継ついでいきたい。」  
江川太鼓はこれからもその音を響かせ続け、小さな町から伝統文化と町の元気を、広く世界に、未来に向けて発信していきます。



①水没した仲町通り。避難する小舟が行き交った。  
すいぼつ なかまち ひなん こぶね か



③会長の森脇淳宏さん演奏の様子（平成27年）。  
もりわきあつひろ へいせい



④京都の和太鼓サークルを川本町に招いて公演するなど、積極的に交流している。  
きょうと わたいこ かわもと



②30周年記念公演のパフレット



## あす「鼓童」と地元公演

川本「江川太鼓」結成40周年

江川太鼓は、水害で、地域イベントなどで大打撃を受けた町を元 積極的に演奏し、勇壮気づけようと町民有志 な響きで復興を鼓動が73年に結成。県内の 活動の舞台を海外まで和太鼓演奏グループと 広げ、ドイツやアマとして先駆的な存在だ。元の高橋生とドイツのそらわす、代わり段 吹奏団との相互交流ホール箱をたいて、練習のきっかけになるな響きするなど、苦勞を重ね、町を代表する芸能団体に成長した。

活動継承へ意欲新た  
1972(昭和47)年に江川流域に甚大な被害をもたらした「47水害」からの復興を目標、翌年から活動を始めた川本町の和太鼓演奏グループ「江川太鼓」(森脇淳宏会長)が結成40周年を迎えた。新潟県佐渡市を拠点に国内外で活躍する太鼓芸能集団「鼓童」と12日、地元で交流公演するのを機に、活動の継承に新たな意欲を燃やしている。

結成当初からほろを振り続けているチーム。2部構成。江川太鼓は、不可。全席指定。問い。1部で代表曲「中田太 合わは同会演。電話0899(7)200(52)は「節目は通過点」を披露。雄大で響く。新たな伝統とやがたが、時に激しくして後世に引き継いで 荒れ狂う大河を演奏で

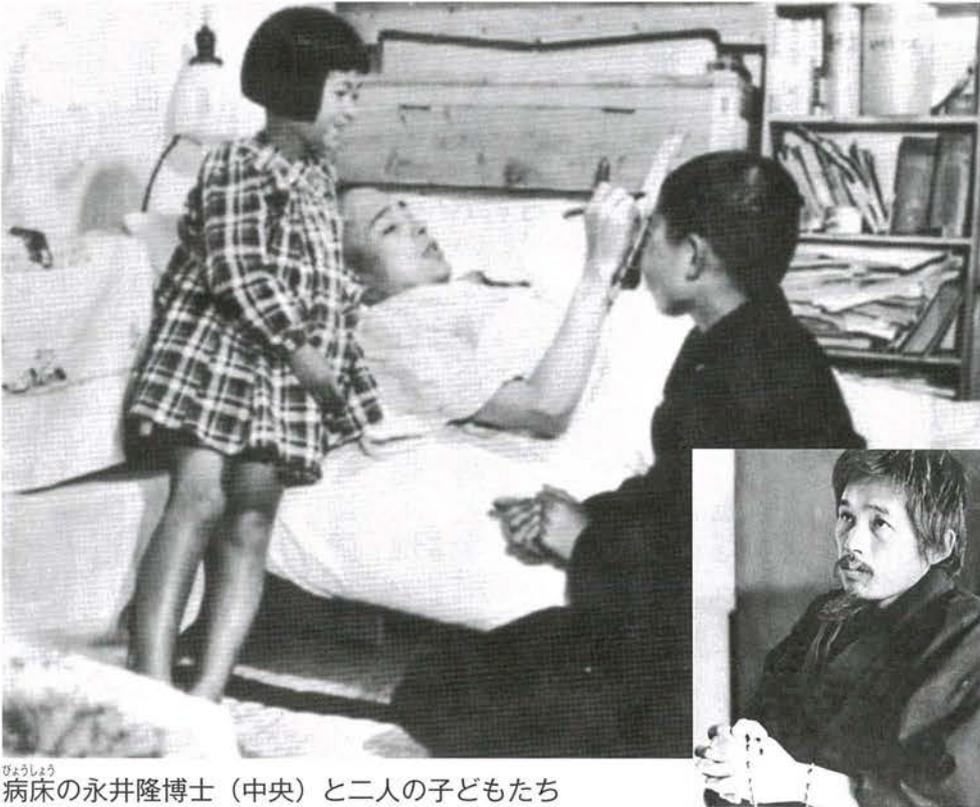
「いきたい」と話し、交流する。2部で、鼓童公演に向けて「神楽童の特別編成メンバー」が迫力の舞台を盛り上げ、演奏をした。開演。午後7時開演。入場料。一般500円、小学生から高校生まで1000円。未就学児は入場不可。全席指定。問い合わせは同会演。電話0899(7)200(52)。

⑤40周年記念公演の新聞記事（山陰中央新報社、2013年5月11日）  
さんいん

# 8

## 「平和を」と祈り続けて

なが  
いたかし  
永井隆博士が命をかけて伝えたこと



病床の永井隆博士（中央）と二人の子どもたち

永井隆博士

### 永井隆博士について

- 明治41（1908）年 松江市に生まれる。
- 明治42（1909）年 父、医院開業のため一家で三刀屋町多久和に転居する。
- 大正9（1920）年 旧制松江中学校入学。高校卒業まで松江で過ごす。
- 昭和3（1928）年 長崎医科大学入学。
- 昭和7（1932）年 放射線医学を専攻する。
- 昭和19（1944）年 医学博士の学位を受ける。
- 昭和20（1945）年 6月 白血病のため、余命3年と診断される。  
8月9日 長崎で原爆被災。
- 昭和21（1946）年 白血病悪化。病床につきながらも執筆活動を始める。
- 昭和23（1948）年 3月 畳2枚の小さな家「如己堂」に移り住む。  
10月 ヘレン・ケラー女史来訪。
- 昭和24（1949）年 昭和天皇から見舞いを受ける。長崎市名誉市民第1号授与。  
『いとし子よ』を発行。
- 昭和25（1950）年 昭和天皇より銀杯、総理大臣から表彰状授与。
- 昭和26（1951）年 5月1日 43歳の生涯を閉じる。

うんなん  
雲南市



ピカッ。ドーン……。

青白い光が目の前をふさぎ、猛烈な爆風が体を宙に吹き飛ばしました。

昭和二十（一九四五）年、八月九日午前十一時二分、長崎に人類史上二発目の原子爆弾が落とされました。

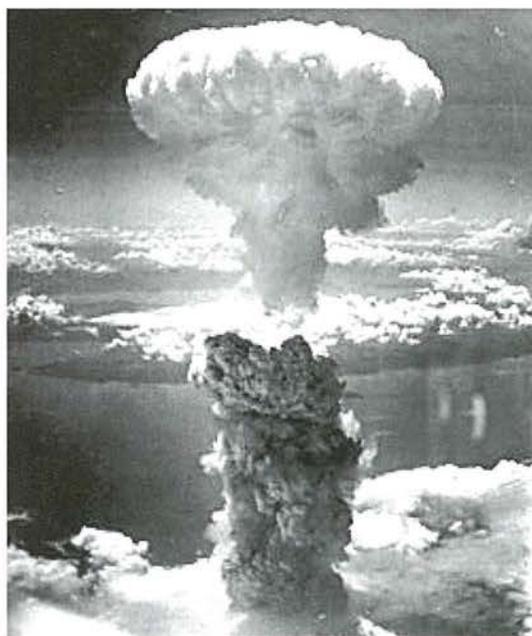
永井隆博士はそのとき、爆心地からわずか六百メートルしか離れていない長崎医科大学附属病院の診察室で、学生に教えるときに使うレントゲンフィルムの整理をしていました。爆風により、博士自身が五メートル近く吹き飛ばされたうえ、顔や体に窓ガラスの破片が刺さるなどして、博士は重傷を負い、血だらけになりました。

（地獄だ、地獄だ……。）

自分の体が大変なことになっているにもかかわらず、博士はすぐに仲間の医師や看護師の先頭に立って、被災者の救出と手当てに没頭しました。

当時、博士には妻の緑と息子の誠一（十歳）、娘の茅乃（三歳）がいました。子どもたちは戦火を逃れて祖母とともに疎開していたので無事でしたが、妻は無残に焼けこげた自宅の台所近くで、小さな黒いかたまりになっていました。

「体の弱い私が生き残り、元氣だった妻のほうが先に骨になってしまおうとは。運命はわからないものだ……。」

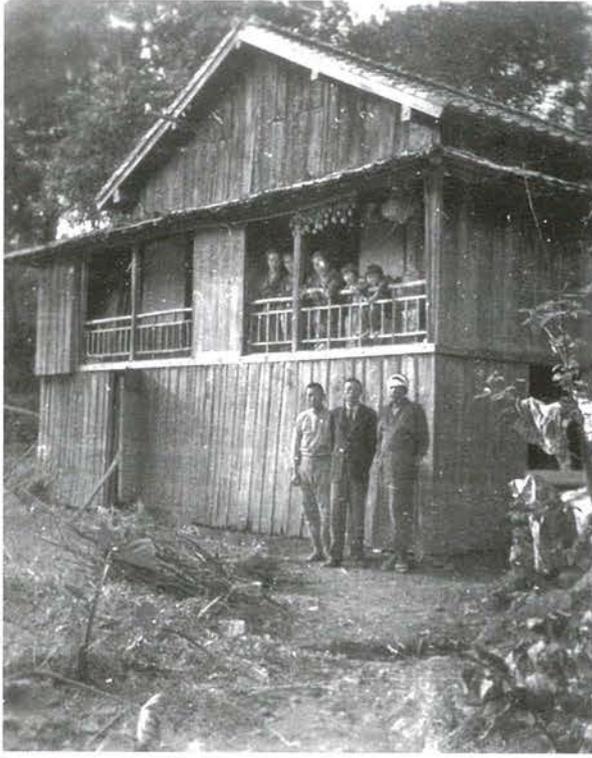


原子爆弾のきのこ雲（撮影者：米軍）

長崎原爆資料館 所蔵

永井隆博士は明治四十一（一九〇八）年、医師であった永井寛の長男として、島根県松江（まつえ）市に生まれ、多感な少年時代を、今の雲南市三刀屋町で過ごしました。高校卒業後、長崎医科大学（現在の長崎大学医学部）への入学を機に、長崎で暮らすようになったのです。

実は原爆投下の二か月前、博士は「余命三年」と診断されていました。博士は長年にわたって放射線医学の研究や、結核まん延を予防する研究のため、レントゲン撮影を繰り返していましたが、戦時中は、さまざまな資材が不足していて、放射線による検査の安全性が保てない状況でした。そのため、博士は大量の放射線を浴びてしまい、血液のがんといわれる白血病にかかっていたのです。



三ツ山救護所（二列目右端が博士）

長崎市永井隆記念館

我が身の命さえ危うい状態にもかかわらず、博士には、休養をとる時間はありませんでした。妻をなくした悲しみに浸る時間もありませんでした。原爆投下から三日後、子どもたちと会いに行ったあと、三ツ山救護所で、寝る間を惜しんで被ばくした人々の救護にあたりました。また、焼け野となった長崎の町を調査して回りました。そして一年後、白血病が悪化した博士の体は治療することができないほど弱り、起き上がることもできなくなっていました。

それでも博士は医師という立場から、原子爆弾の恐怖や被害の様子を記録に残し、世界中に知らせるため



子どものために建てた「うちの本箱」 長崎市永井隆記念館

に、布団に横たわりながらも筆を執り続けたのです。

晩年の約三年間は、畳二枚分の小さな家へ住まいを移して執筆活動を続けました。博士は、「如己愛人」（自分と同じように人も愛す）の精神を大切にしていたと願い、住まいを「如己堂」と名付けました。如己堂での執筆で得たお金の大部分は、学校や病院などに寄付をしました。原爆により焼け野となった長崎を再建し、子どもたちのためにできるだけよい環境を築きたいと考えていたのです。「うちの本箱」という

子どものための図書室は、家族や住む場所を失った子どもたちの心を豊かにし、夢を与えたいと願う博士がつくったものです。博士は、誰でも自由に本を読み、勉強ができるようにしたのでした。

また、博士は自ら記した「平和を」という書を約千枚、国内外の人々へ送り、ともに平和な世界をめざして努力するよう訴えました。そんな博士のもとに、天皇陛下をはじめ、多くの人々が見舞いに訪れ、その名や考えは世界に広く知られるようになりました。



如己堂（外観） 長崎市永井隆記念館



「平和を」の書

見舞いに訪れ、その名や考えは世

博士は息を引き取るまでの約五年間で十七冊の本を書き上げました。なかでも『長崎の鐘』という作品は映画化され、世界中の人に感動を与えました。

博士は著書の中で次のメッセージを残しています。

「誠一よ、カヤノよ、たとい最後の二人となっても、どんなのしりや暴力を受け  
ても、きっぱりと「戦争絶対反対」を叫び続け、叫び通しておくれ！ たとい卑  
怯者とさげすまれ、裏切者とたたかれても、「戦争絶対反対」の叫びを守ってお  
くれ！（中略）愛で身を固め、愛で国を固め、愛で人類が手を握ってこそ、平  
和で美しい世界が生まれてくるのだよ。」

（『いとし子よ』サンパウロ より抜粋）



博士の「平和を」の願いと「如己愛人」の教えは、今も多くの人々に引き継がれています。



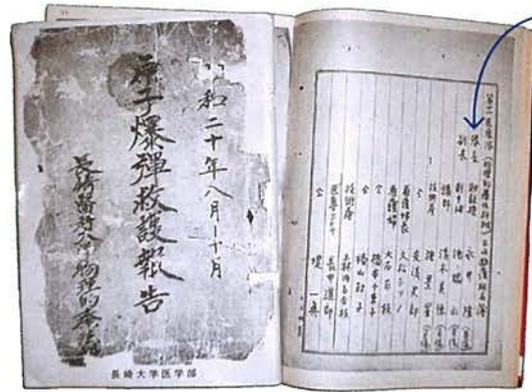
①生立ちの家（雲南市三刀屋町多久和）

豊かな自然に囲まれたこの家で、博士は少年時代を過ごした。医者であった父の教え「以愛接人」の書が、部屋に掲げてある。



③ヘレン・ケラー来訪（上段左側）

三重苦を克服した偉人として知られるヘレン・ケラーの来訪は、博士の平和への思いに勇気と力を与えた。



②原子爆弾救護報告

原爆投下後の救護班の名簿。いちばん右の隊長の欄に、「永井隆」の名前がある。



④いろいろな外国語に翻訳された本

博士の著書は、英語、フランス語、韓国語、中国語、タイ語など、多くの国々で翻訳されて、今も読まれ続けている。



雲南市での取り組み

雲南市では、博士の教えを今に引き継ぐために、さまざまな活動を行っている。その一環として、毎年7月に「永井隆平和賞」を設け、全国の小学生から一般の人までを対象に、「愛」と「平和」に関する作文を募集している。

また、博士の生き方を取り上げた雲南市創作市民演劇「Takashi」は、若手演出家コンクールに出品され、東京でも上演された。



東京公演も果たした、博士の人生を題材にした舞台



昭和30（1955）年6月8日、東京の帝国ホテルにて、キリノ元大統領（右）と会見する加納莞菴さん（左）

# 9

## 救<sup>\*1</sup>ゆるし難<sup>がた</sup>きを救す

世界の平和を求め続けた画家

加<sup>か</sup>納<sup>の</sup>莞<sup>う</sup>菴<sup>かん</sup>菴<sup>ら</sup>菴<sup>い</sup>

### 加納莞菴さんについて

- 明治37（1904）年 島根県能義郡布部村（今の安来市広瀬町布部）に生まれる。
- 大正13（1924）年 布部村の小学校教師になる。
- 昭和12（1937）年 小学校を退職して、朝鮮半島に渡る。
- 昭和13（1938）年 戦争の記録を描く従軍画家として、戦地であった中国の山西省で勤務。
- 昭和20（1945）年 終戦により帰国。
- 昭和24（1949）年 フィリピンにいる日本兵の助命嘆願活動に取り組む。
- 昭和28（1953）年 フィリピンのキリノ大統領が特救<sup>\*2</sup>声明を発表する。
- 昭和29（1954）年 布部村長になる。昭和32（1957）年まで在職
- 昭和31（1956）年 布部村長として「布部村平和五宣言」を宣言する。
- 昭和52（1977）年 73歳でなくなる。

安来市



「加納先生、大変ですわ！」

太平洋戦争が終わって四年目の三月、画家である加納莞菴のもとに、かつての教え子恩田が駆け込んできた。戦時中にフィリピンで起きた民間人百五十二名の虐殺事件における指導者としての責任を問われ、フィリピンで裁判を受けていた元海軍少将に、銃殺刑の判決が下ったというのだ。少将の妻は莞菴と同じ布部村（現在の安来市広瀬町布部）の出身で、かつて莞菴は、フィリピンから戻ってきたばかりの彼に会ったことがあった。「部下の行為はすべて上官である私の責任である。罰しなければならぬのであれば、私だけを罰せよ。」

フィリピンでの裁判で、彼はこう主張したという。動揺して震える恩田の声を耳にしながら、莞菴は、苦悩に満ちた表情とともに彼がゆっくりと語った言葉を思い出した。

「司令官として、戦争とともに戦った若者たちを死に追いやった自分の罪は大きい。」

「きつと死刑判決が出るでしょう。でも、けっして減刑運動などはしないでほしい……。」

莞菴はその固い決意に同意したものの、だんだんと、彼こそは、新しい世を築くために失うことのできない存在だと思えてきた。

（なんとかしなくては……。）



\*1 赦す  
罪や過失をどがめだてしないことにする。

\*2 特赦  
有罪を言い渡した者に対して、その効力を失わせること。

\*3 少将  
軍隊の階級の一つ。

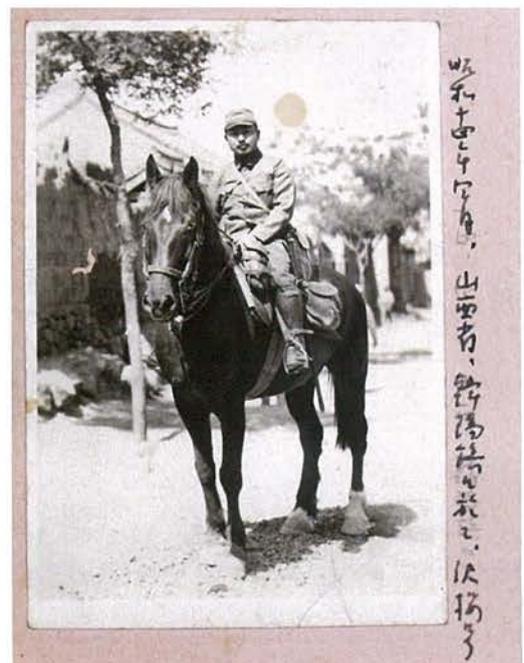


加納莞菴（本名・辰夫<sup>たつお</sup>）は、布部村に生まれた。画家として活動していた昭和十三（一九三八）年、三十四歳のときに従軍画家として中国の山西省に渡った。現地部隊とともに行動して、戦争の記録を描くことが仕事であった。莞菴はそこで、戦争がいかに悲惨で残虐非道で、人を狂気に追いやるものかということをもまざまざと見せつけられたのである。

なぜ、殺し合わなければならぬのだろうか……。終戦を迎えてからの莞菴は、これから平和な世の中を築いていく一員として何をすればよいのか、自分の生き方を模索していた。そのなかで、今回のことを聞いたのだった。

莞菴は約束を破り、助命嘆願<sup>\*4</sup>の活動をする決意をして上京した。活動は困難を極めたが、友人や知人を頼り、助言を受けて、フィリピンのキリノ大統領に嘆願書<sup>\*5</sup>を送る方法にたどりついた。そして、嘆願書の作成に取りかかった。

活動をするなかで、莞菴はフィリピンの大使や役人など政府の関係者たちと交流を深め、戦争についての意見を交えるようになった。そして、フィリピンの人たちが占領下で受けた被害や痛み、さらには、キリノ大統領の妻と三人の子どもや親族の命が日本軍によって奪われたことも知った。元海軍少将の助命を目的として活動を始めた莞菴だったが、行動するうちに、世



中国、山西省での莞菴

\*4 助命嘆願  
殺される予定の命を助けるために願い出ること。

\*5 嘆願書  
事情を述べて願いを記した手紙、書類。

界平和実現に向けての思いを強めていった。

何通も送った嘆願書に、莞薔はこのように記している。

「戦争の中で行われた残忍な行為は人道<sup>さんじん</sup>上、赦<sup>ゆる</sup>されるものではありません。しかしながら私の願いは『赦<sup>かた</sup>し難<sup>がた</sup>きを赦<sup>ゆる</sup>す（ゆるすことが難しいことをゆるす）』ためのものです。」

「互<sup>たが</sup>いの国に平和が訪<sup>おとず</sup>れたとき、文化や芸術が発展し、良き世が来るでありますよう。」

「大統領の手から残酷<sup>ざんく</sup>にも奪<sup>うば</sup>い取られたあなたの愛児の名において、すべてを赦されたい。殺されたあなたの愛児たちこそが次の世の平和を望んでいるのです。」

「この崇高<sup>すうこう</sup>なる奇跡<sup>きせき</sup>の成就<sup>じょうじゆ</sup>のあかつきには、大統領の愛児が神にささげられた姿を救いの天使として、画布の上に不朽<sup>\*6</sup>にとどめたい覚悟<sup>かくご</sup>であります。」

莞薔は助命だけでなく、芸術家という立場で、国境を越えて文化や芸術が発展する平和な世の中を願う気持ちをも伝えたのだった。

ところが、大統領からは何の返事も来ない。家族は、莞薔が嘆願活動をする影響で生活が苦しいと訴<sup>うった</sup>えたが、莞薔は、家族を説得して嘆願書を送り続けた。莞薔が書いた原稿<sup>げんこう</sup>を英語教師である知人に英訳してもらい、自分で清書したものを自分で印刷するという手間のかかる作業だったが、その数は二百通を越えた。



\*6 不朽  
いつまでも価値を失わずに残ること。

昭和二十八（一九五三）年七月六日、キリノ大統領の日本兵についての声明が世界に向けて発信された。

「私は、妻と三人の子ども、そして五人の親族を日本人に殺された者として、彼らを許すことができるとはよもや思ってもみなかった。しかし私は、私の子孫や国民が、恒久の利益をもたらず日本人に対する、憎悪を受け継ぐことがないよう、これを行うのである。」

このニュースに日本中が喜びに沸いたが、莞薔は喜びを見せることなく、こうつぶやいた。

「赦された人々は、なぜ自身が赦されたかをわかっているだろうか……。」

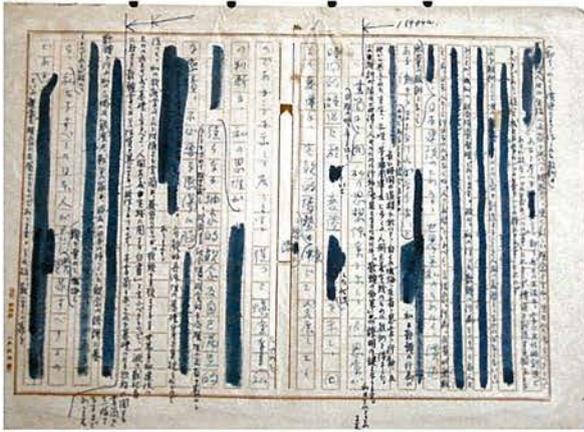
晩年の莞薔の作品「黒牡丹」



莞薔は、この声明は、単に助かった助けられたという話ではないと考えた。日本は、キリノ大統領に大きな課題を与えられたのだ。声明を重く受け止めることが、日本が真に平和を求めていくスタートになる、と。

その後、莞薔は布部村長として、世界平和の実現のために力を尽くしたのだった。しかし莞薔は、嘆願書に書いたキリノ大統領の愛児の絵を描くことはできなかった。

\*7 恒久  
ある状態が永く変わらないこと。永久。



①何度も書き直した跡が残る、嘆願書の原稿。



②嘆願書は謄写版印刷（原紙に鉄筆で字を書き、印刷インクをつけて印刷する）で作成されたため、莞菴の原稿の一部が、今でも加納家に残っている。



③浜田市立原井小学校の校長室に飾られている、莞菴の作品「裏富士」。莞菴は、かつて原井小学校の教師であった。



④平成27年11月13日、莞菴の娘、佳世子さんが、キリノ元大統領の孫娘ルビーさんと面会した。ルビーさんは、「フィリピンと日本の関係は二人の友情によって築かれました。これからは、私たちの世代が友好関係を築いていかなければなりません。」と語った。

魂たましいの和太鼓奏者今福いまふく優ゆうさんドローン  
ドローン

(撮影 太田章彦)

### 今福 優さんについて

- 昭和31 (1956) 年 美濃郡匹見町 (今の益田市匹見町) に生まれる。
- 昭和55 (1980) 年 24歳 和太鼓集団「鬼太鼓座」に入座。
- 昭和58 (1983) 年 27歳 鬼太鼓座を退座。  
この後8年間、運送会社に勤めながら太鼓やトラックを購入するなど、ソロ活動のための準備を行う。
- 平成4 (1992) 年 36歳 運送会社を退社し、ソロ活動を始める。
- 平成5 (1993) 年 37歳 韓国で開かれた「第1回国際太鼓フェスティバル」に出演。  
以降、インドネシア、キューバ、ドミニカなどに遠征。
- 平成20 (2008) 年 52歳 「青山太鼓見聞録」(青山劇場) に出演。  
ほか、国内のイベントに多数出演。  
海外では、アメリカ、フランス、ブラジルなどに遠征。

ますだ  
益田市



この夏、僕には忘れられない出会いがあった。今福優さん、全国や海外で公演を行っている太鼓打ちだ。僕の学校では毎年、今福さんの指導による和太鼓の授業がある。僕たち一年生にとっては初めての体験だった。

「今福さんは情熱的な人です。みなさん、本気を出さないとすぐ大声が飛んできますよ。」先生の言葉にドキツとした。僕のクラスは、みんな周りの目を気にして遠慮しているのか、どこことなく冷めている雰囲気があった。そんなクラスを今福さんはどう思うのだろう。そんなことを考えながら、授業が行われる体育館へ向かった。

「まったく、暑いのに面倒だよなあ。まあ、適当にやろうぜ。」

雅也が話しかけてきた。彼はお調子者のところがあって何かと理由をつけてはサボろうとするが、なぜかいつも一緒にいる。

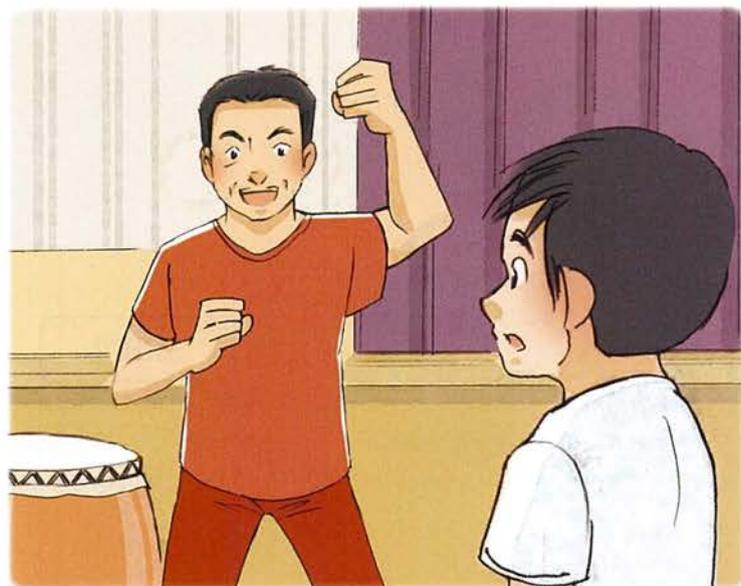
「ああ、そうだな。」

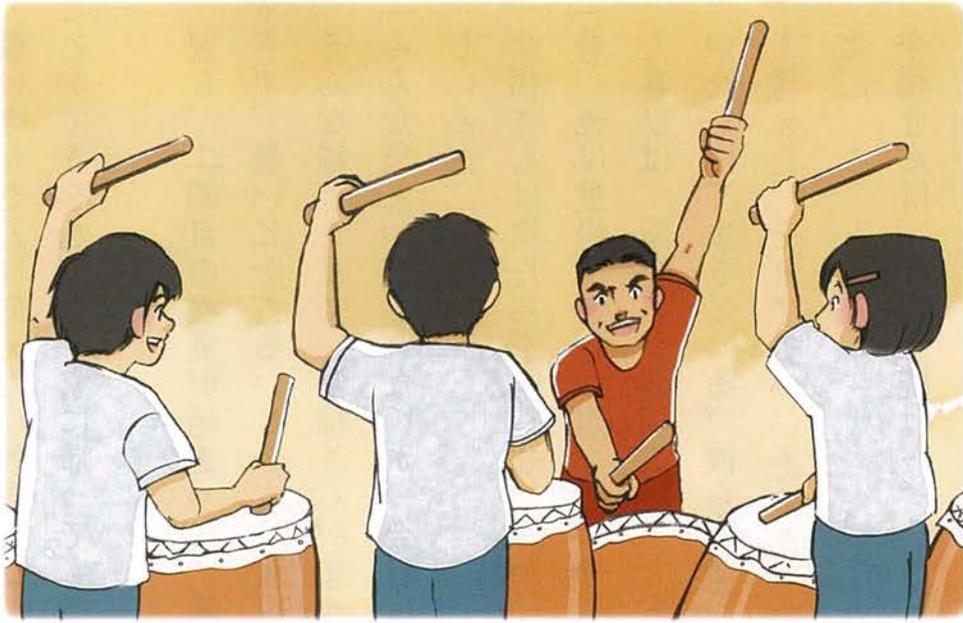
いつもどおり調子を合わせて答えながら体育館に入った。

「こんにちは。」

入るやいなや、大声で挨拶をする男の人に圧倒された。短髪にがっちりした体格、赤いTシャツとジャージにはだし。全身から力がみなぎっている。怖いと感じたのは僕だけじゃないはずだ。急に緊張感と不安が襲ってきた。

どこでもいいと言われ、僕は雅也と一緒に、目立たないように二列目の端の太鼓を選んで立った。





「自分の全部を出し切って。そして、何かを感じてください。」  
勢いのある声で授業が始まった。  
教えてもらうのは「生命の詩」という演目だ。今福さんと交互に太鼓をたたき、最後は全員で大きな声を出す。

「ドン、ドン、ドン。」

初めてたたく太鼓の音は意外に心地よく、全員でたたくと迫力があつた。今福さんの指導に熱が入る。僕は、太鼓のおもしろさを感じ始めていた。

「もっと腕を伸ばすんだ。」

「体の中から声を出そう。」

僕が「よし、頑張るぞ。」と腕を伸ばしたとき、ちょうど雅也と目が合った。その目は、（お前、何熱くなってるの。）とても言いたげだった。僕は、腕をそっと下げた。

やがて、全体で失敗が目立つようになり、掛け声も小さくなっていった。すると突然、演奏が止まった。

「みんな、どうして本気でやらないんだ。」

「ついに今福さんがなった。」

「うまくたたきなさいとか、そういうことじゃない。気持ちの問題なんだ。もっと心を合わせようよ。自分の全部を出し切ろうよ。」

僕は今福さんに応えたいと思いつつも、周りも、特に雅也が気になって、どうしても自分を出すことができなかった。家に帰っても何かすっきりとせず、ため息ばかりついていた。

翌日、二回目の授業が始まった。僕は今福さんの顔を見ることができず、暑いとかだるいとか言う雅也の文句を適当に聞いていた。

そんな様子を見て、今福さんが言った。

「みんな集まってくれないか。今日ははじめに俺の太鼓を聞いてほしいんだ。」

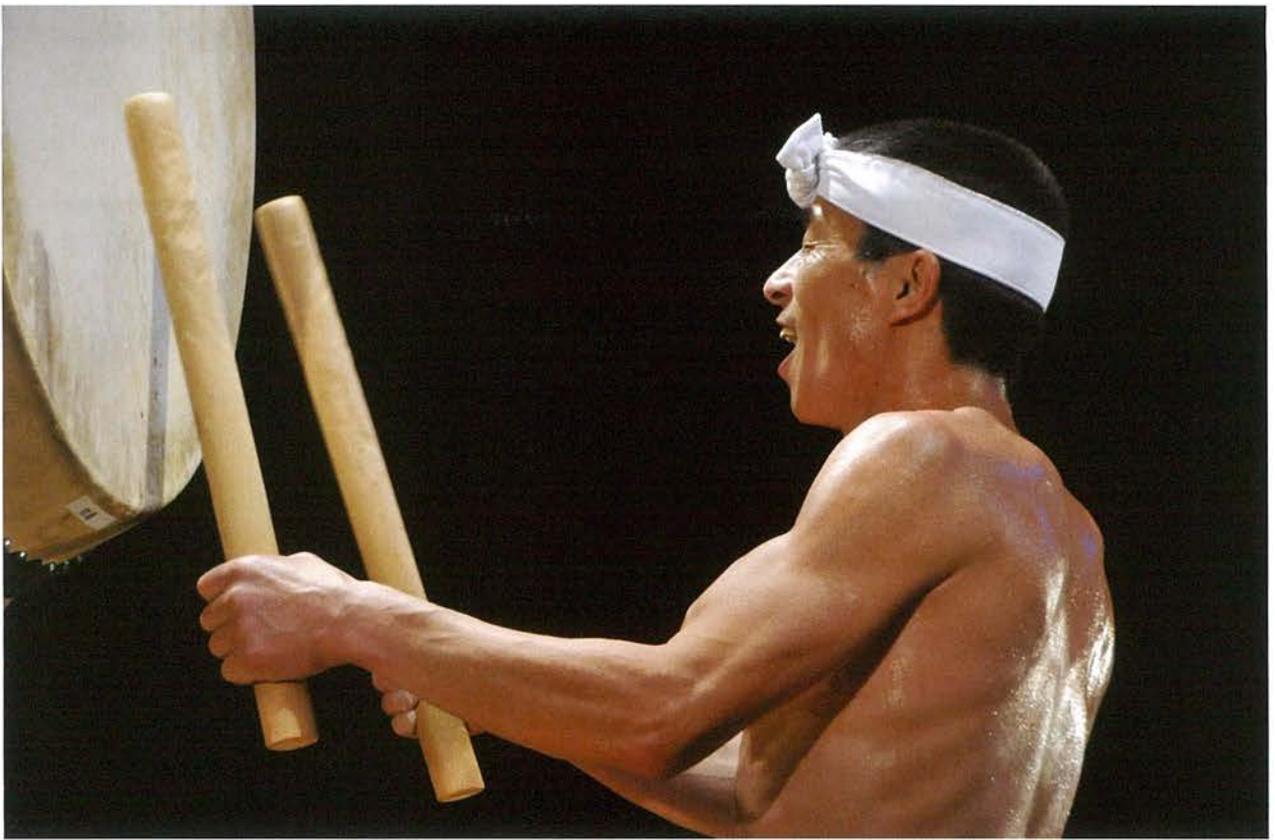
今福さんは僕たちを座らせ、静かに語り始めた。

「昔、俺は農場で働き、鶏や豚の世話をしていたんだ。立派に育った喜びは、同時にうれしいことでもあった。俺たちは、彼らの命をいただいで生きている。彼らの命ってなんなんだろう……、何度も考えた。それで気づいたんだ、『自分は生かされているんだ』と。」

今福さんは、力強く続けた。

「それから太鼓に出合って、太鼓で何を伝えるかを考えたとき、まず思ったのが『生きる』ということだった。俺は太鼓で生きる意味を伝えたい。この思いから生まれたのが『生命の詩』なんだよ。生きていく以上、一生懸命生きなきゃだめだと知った。だから、君たちにもこうして伝えたいんだ。」





そう言うと、今福さんは上半身裸はなみになってぎゅっと鉢巻はちまききを締しめた。そして、じっと集中すると、一人で太鼓を打ち始めた。

「ドコーン ドコーン。」

今福さんの魂たましいが、太鼓にぶつかる。ひとつひとつの音が、力強く、重たく、ズシンとおなかに響ひびいてくる。この音は、生命いのちの音。この音は、今福さんの生き方そのもの。歌詞はなけれど、今福さんのメッセージがそこにあった。僕は自分が恥はずかしくなった。そして、無性むじやうに太鼓がたたきたくなった。

練習が始まると、僕は一列目の真ん中に立った。ぎゅっとばちを握にぎり、目を閉じて自分に言い聞かせる。「自分の殻からを破れ。」と。昨日の自分と今日の自分が戦っている。

「さあ、やろう。」

今福さんの掛け声とともに、目を開けて、腕うでを高く伸ばし、カいっぱい振り下ろした。

「ドオーン。」

その音は、足先から体中を突き抜ぬけ、昨日とはまったく違ちがって聞こえた。



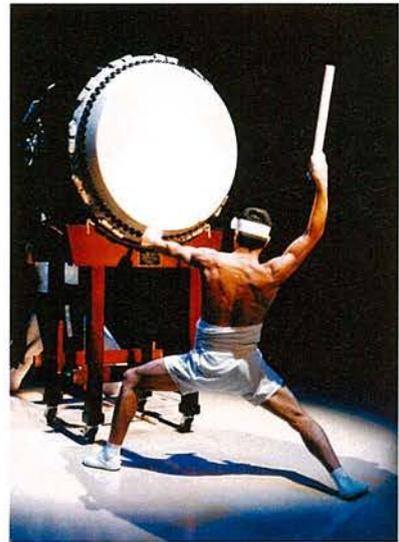
たいこ いまふくゆう  
①太鼓打ち 今福優



ながさき さいころ  
②長崎県の農場で働く (21歳頃)



おんでこご  
③「鬼太鼓座」時代、雪の中での練習の様子  
(左端が今福さん)



④大太鼓をたたく



いわみかぐら  
⑤石見神楽とともに



ますだ やすだ  
⑥益田市立安田小学校での公演の様子  
(撮影 MASUDA KOHBOH Inc.)

## 11 ネット将棋

「うむむ、これは厳しいなあ。」

僕と敏和との将棋を横で見ている拓也がつぶやく。

「わかっているよ。僕の負けだと言いたいのだろ。早く投了<sup>\*1</sup>しろってことか。そんなことが簡単にできるか。」

春休みが明けて、久しぶりの学校だ。金曜日の昼休み、多目的室での将棋タイムは楽しみの一つで、腕前は僕よりは下だと思っていた敏和と、一戦交えていた。簡単に勝てると思っていたのに、僕の知っている敏和ではない。四十手ほどの指し手で、圧倒的に僕は不利な状況に追い詰められてしまった。

「敏和のやつ、いつの間に強くなったんだ。こんな恥ずかしい負け方ができるものか。」

「こうなれば、指し手を遅くして時間切れで逃げよう。」

<sup>\*2</sup>対局時計を使っただけの対戦ではないので、一手一手に考え込んでいるふりをして、徹底的に時間稼ぎをした。見ている和夫たちは退屈したのか、別の組の観戦に回った。

やっと昼休み終了のチャイムが鳴った。僕はいかにも残念そうに言った。

「いいところなのに、時間切れだな。とりあえず引き分けということにしとくか。」

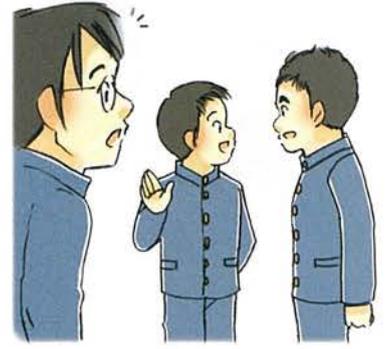
敏和は嫌そうな顔もせず、手早く駒を片付けるのが、かえってしゃくにさわる。

教室への廊下を歩きながら、拓也が敏和に話し掛けた。

「敏和、どうした。ちよっとの間に強くなっているじゃないか。」

\*1 投了  
不利な方が負けを認め、指さずにただちに勝負が終わること。

\*2 対局時計  
対戦を行う際に競技者の持ち時間や制限時間などを表示して時間管理を行うための時計。



すると、敏和は笑いながら言った。

「実は、インターネット将棋を始めたんだ。そこで、定跡せいじせきの勉強をしたり、対局を申し込んで実戦したりして。まだまだだけど、少しは強くなっただかも。時間があったら、やってみて。いろんな道場があるから。」

〈敏和のやつ、そんなことをしていたのか。〉

聞き耳を立てていた僕は、さっそく試ためしてみることにした。

帰宅して、飛びつくようにパソコンに向かった。幾つかのサイトに当たってみて、これならまあ勝てそうだと思った中学生に挑戦を申し込んだ。「持ち時間二十分、切れたら一手三十秒」の条件で応じてくれた。

ところが、勝てるどころか、あっという間に僕の陣形は壊滅かいめつ的な状態になった。これが同じ中学生の実力なのかと、情けなくなってきた。王将が詰むまでにはまだ手数てかずはかかると思われたが、僕は完全に戦意を喪失そうしつして、これ以上やっても無駄むだだと感じた。

ボロボロになった盤面ばんめんを見ているのも嫌になり、僕は黙だまってコンピュータ画面を閉じた。〈どうせ顔が見えるわけでもなし、本名を名乗っているわけでもなし、相手だって本当に中学生かどうか怪あやしいものだ。みんなこんなものだろ。真面目にやっついていられるか。〉しかし、そうは言っても何とか勝ちたくて、土曜日と日曜日はネット上の対戦をあちこち見物し、弱そうな相手に見当をつけて勝負を申し込んだりした。そういう時は、勝つには勝つが面白い。技量が上の相手には、やはり勝つことができず、面白い。どっちにしても、いきなりログアウトしてやる。



\*3 定跡  
昔から研究されてきて  
最善とされる、決まっ  
た指し方。

〈敏和はネット将棋で強くなったと言っていたけど、本当だろうか……。〉

週明けの月曜日、僕の隣の席で、明子の元気がない。落ち込んでいます、という沈んだ空気が体中から出ている。思わず声を掛けた。

「明子、どうした。相当へこんでいるな。」  
すると、後ろの席から智子が言った。

「無理ないよ、昨日、ソフトボールの地区大会でヒロインになりそこねたもの。一点差で負けている七回裏、ツーアウトでランナー二・三塁、一打、逆転サヨナラの大チャンス。ここで打たなくてどうする。ところが、何とも情けない見逃しの三振、ゲームセット。これでへこまずにいられますかって。ヒロインじゃなくても、せめてデッドボールで塁に出たかったよ。最後のバッターにはなりたくないもん。『私のせいで負けました、ありがとうございました。』なんて絶対に嫌だから……。」  
僕は内心、つぶやいた。

〈それは、そうだ。そんな気分が悪いこと、言えるか。〉

「なのに、監督は終わりの挨拶で、『明子は二重にいい体験をしたな。ラストバッターの経験に加え、悔しさ紛れに、心を忘れた挨拶しかできなかった自分というものを知ったことだ。目の前の相手にお礼を言うことすらできないようでは、決して強くはなれないぞ。』だって。訳がわからないね。」  
間髪入れずに、

「私、今ならわかる気がする……。」  
と、明子が言った。

そこへ、敏和も話に入ってきた。

「僕の好きな将棋では、誰もがいとも最後のバッターだよ。誰も代わってくれないし、それに『負けました。』って、自分で言わないと対局が終わらない。」

智子が驚いたように言う。

「それって、きついでしょ。」

「きつかったよ。特にネット将棋なんか、見えない相手に『お願いします。』で始まって、勝負がついたと思ったところで、自ら『負けました。』って言う。そして、終わりには『ありがとうございしました。』と挨拶するんだけど、こういうのは、最初、実感がなかったなあ。でも、目に見えない相手とどう向き合うかで、自分が試されてる気がしてきて、きちんと挨拶できるようになったよ。」  
静かに聞き入っている明子をよそに、智子は更に尋ねた。

「だからといって、強くなる訳じゃあないでしょ。」

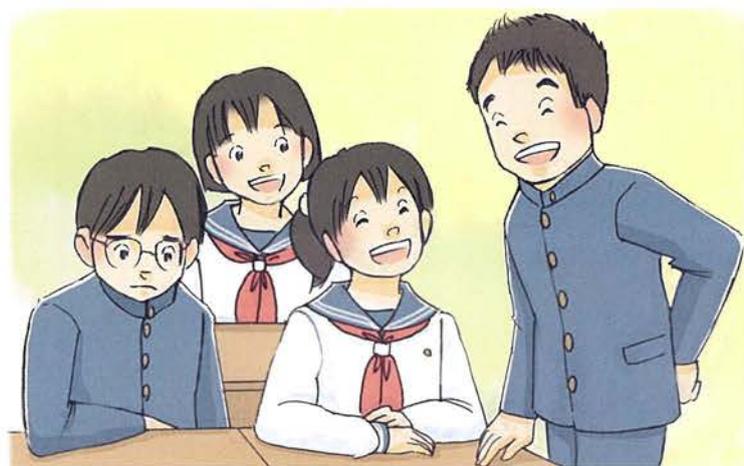
「強くなるために、『負けました。』って言うのじゃないと思う。心から『負けました。』って言うことで、対局後の感想戦で検討される好手や悪手がスーッと頭に入ってきて、心にすみつく。それで、力が伸びていくのだと思う。初めての人も仲良くなれるしね。だから、最後は『ありがとうございました。』って、本気で言えるんだ。」

智子は、敏和と明子を交互に見ている。自分に言い聞かせるように、明子が言った。

「まあ私も、試合の前と後で、『お願いします。』『ありがとうございました。』は言っているけど、そこまで考えたことはなかったなあ。敏和くんって大人なんだ……。そうか、『負けました。』と言える試合をすればいいんだ。」

「ほおー。明子、深いこと言うなあ。それとも、負けた言い訳かい。」

敏和のツツコミに明子と智子は笑ったが、僕は笑えなかった。



## 12 言葉の向いふ

夜中に、はっと目が覚めた。すぐにベッドから起き出してリビングへ降り、パソコンの電源をつける。画面の光が部屋の片隅にまぶしく広がった。

私は、ヨーロッパのあるサッカーチームのファン。特にエースストライカーのA選手が大好き。ちょうど今頃、向こうでやっている決勝の試合が終わったはず。ドキドキしながら試合結果がわかるサイトをクリックした。やった、勝った。A選手、ゴール決めてる。思わず声が出てしまった。大声出したら家族が起きちゃう。そっと一人でガッツポーズ。みんなもう知ってるかな。いつものように日本のファンサイトにアクセスした。画面には、「おめでとう」の文字があふれてる。みんな喜んでる。うれしくて胸がいっぱいになった。私もすぐに「おめでとう」と書き込んで続けた。

「A選手やったね。ずっと不調で心配だったよ。シュートシーンが見たい。」  
すると、すぐに誰かが返事をくれた。

「それなら、観客席で撮影してくれた人のが見られるよ。ほら、ここに。」  
「Aのインタビューが来てる。翻訳も付けてくれるよ。感動するよ。」

画面が言葉で埋め尽くされていく。私は夢中で教えてくれたサイトを次々に見に行った。

学校でもサッカーの話をするけど、ヨーロッパサッカーのファンは男子が多い。私がA選手をかっていいよね、って言っても女子同士ではあんまり盛り上がりがない。寂しかったけど、今は違う。ネット





トにアクセスすれば、ファン仲間がいっぱい。もちろん顔も知らない人たちだけ。今この瞬間、遠くの誰かが私と同じ感動を味わってる。なんか不思議、そしてうれしい。気がつくともうすぐ朝。続きはまた今夜にしよう。

今日は部活の後のミーティングが長かった。家へ帰ると、食事を用意して待っていた母に、

「ちよっと待ってて。」

と言って、パソコンに向かった。優勝後のインタビューとか、もっと詳しく読めるかな。楽しみ。

〈Aは最低の選手。あのゴール前はファールだよ、ずるいやつ。〉

開いた画面から飛び込んできた言葉に、胸がどきっとした。なに、これ。

〈人気があるから優遇されてるんだろ。たいして才能ないのにスター気取りだからな。〉

ひどい言葉が続いてる。読み進むうちに顔がほてってくるのがわかった。怒りでいっぱいになって夢中でキーボードに向かった。ファンサイトに悪口を書くなんて。

〈負け惜しみなんて最低。悔しかったら、そっちもゴール決めたら。〉  
すると、また次々に反応があった。

〈向こうの新聞にも、Aのプレイが荒いって、批判が出てる。お前、英語読めないだろ。〉

「Aのファンなんて、サッカー知らないやつばかり。ゴールシーンしか見てないんだな。」

「Aは、わがまま振りがチームメイトからも嫌われてるんだよ。」

必死で反論する私の言葉も、段々エスカレートしていく。でも絶対負けられない。

「加奈子、いい加減にきなさい。食事はどうするの。」

母の怒った声。はっと気付いて時計を見た。もう一時間もたってる。

「加奈ちゃん、パソコンは時間を決めてやる約束よ。」

ずっと待たされていた母は不機嫌そうだった。

「ごめんごめん。ちょっと調べてたらつい長くなっちゃって。」

「そうなの。なんだかこわい顔してたわよ。加奈ちゃん、こっちに顔を向けて話しなさい。」

「はい、わかりました。ちゃんと時間守ります。お母さんのご飯おいしいよね。」

そう言いながらも、私の頭はA選手へのあのひどいコメントのことでいっぱいだった。

「まったく調子いいんだから。でもね、ほんとかどうか目を見ればわかるのよ。」

私は思わず顔を上げて母を見つめた。その表情がおかしかったのか、母がぷつと吹き出した。つら

れて私も笑った。急におなかがすいてきちゃった。

食事の後、サイトがどうなっているか気になって、恐る恐るパソコンを開いてみた。

「ここにA選手の悪口を書く人もマナー違反だけど、いちいち反応して、ひどい言葉を向けてる人、

ファンとして恥ずかしいです。中傷を無視できない人はここに来ないで。」

ええーっ。なんで私が非難されるの。A選手を必死でかばってるのに。

「A選手の悪口を書かれて黙っていろっ言うんですか。こんなこと書かれたら、見た人がA選手の

ことを誤解してしまうよ。』

『あなたのひどい言葉も見られています。読んだ人は、A選手のファンはそういう感情的な人たちだって思っちゃいますよ。中傷する人たちと同じレベルで争わないで。』  
なんで私が責められるのか全然わからない。キーボードを打つ手が震えた。

『だって悪いのは悪口書いてくる人でしょ。ほっとけって言うんですか。』  
『挑発に乗っちゃだめ。一緒に中傷し合ったらきりがないよ。』

優勝を喜び合った仲間なのに。遠くのみんなとつながってるって、今朝はあんなに実感できたのに。なんだか突然真っ暗な世界に一人突き落とされたみたいだ。

もう見たくない。これで最後。と、もう一度画面を更新した。

『まあみんな、そんなきつい言い方するなよ。ネットのコミュニケーションって難しいよな。自分もどうしたらいいかなって、悩むことよくある。失敗したなーって時も。』  
『匿名だからこそ、あなたが書いた言葉の向こうにいる人々の顔を思い浮かべてみて。』

えっ、顔。思わず私はもう一度読み直した。そして画面から目を離すと椅子の背にもたれて考えた。

そうだ……。だめだなあ。何で字面だけにとらわれていたんだろう。いちばん大事なことを忘れていた。コミュニケーションしているつもりだったけど。

私は立ち上がり、リビングの窓を大きく開け、思いっきり外の空気を吸った。

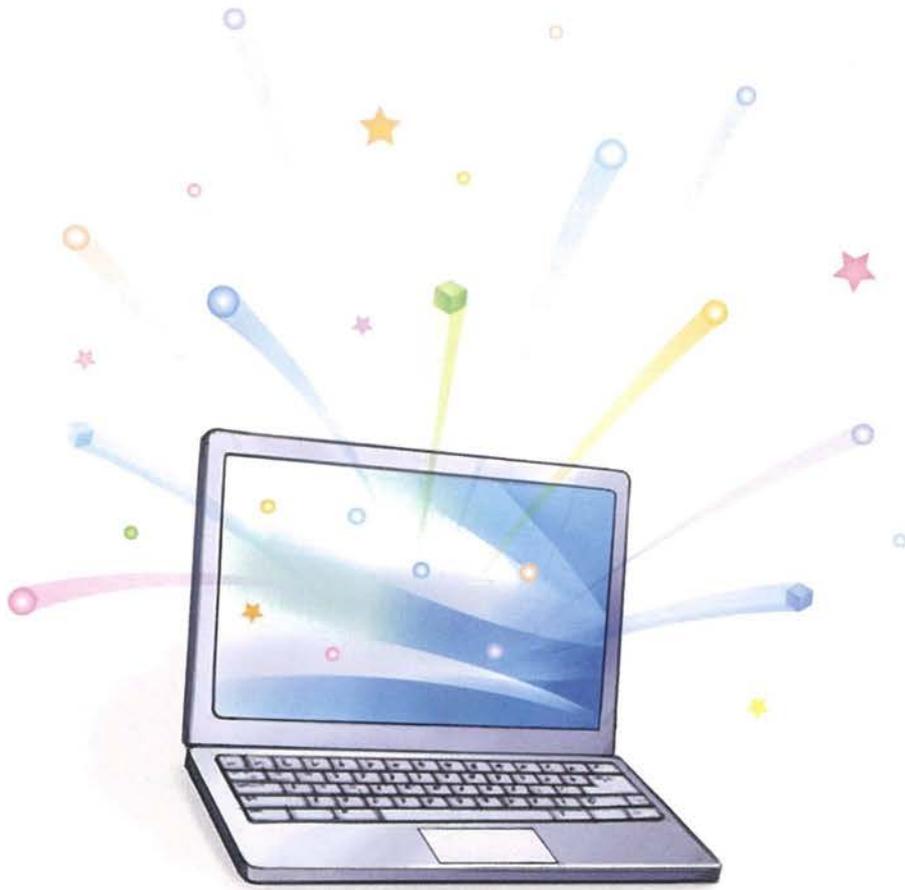
「加奈ちゃん。調べ物はもう終わったの。」

台所から母の音がする。

「調べ物じゃないの。すごいこと発見しちゃった。」

私は、明るい声で母に言った。





## しまねの道徳 中学校

|    | 内容             | 写真／絵  |
|----|----------------|---|
|    | 道徳の授業は……       | 出雲市立中部小学校、隠岐広域連合立隠岐島前病院／クリエイティブ・ノア（松沢ゆきこ、なぎさ謙二） |
| 1  | 語りこそわが人生       | 益田市立歴史民俗資料館                                     |
| 2  | 島で学ぶ           | 島根県立隠岐島前高等学校／クリエイティブ・ノア（坂道なつ）                   |
| 3  | 百メートルは一生の友     | 出雲市立中部小学校／クリエイティブ・ノア（宮崎匠）                       |
| 4  | 道づくりにかける       | 邑南町立石見東小学校、断魚開発組合／クリエイティブ・ノア（長谷部徹）              |
| 5  | 離島医療の仕事はおもしろいで | 白石吉彦、西ノ島町、隠岐広域連合立隠岐島前病院                         |
| 6  | 松江城を国宝に        | 松江市、松江城国宝化推進室、松江市史料編纂室、愛知県丹羽郡大口町                |
| 7  | 響け 江川太鼓        | 江川太鼓同好会、川本町、江川太鼓Facebook                        |
| 8  | 「平和を」と祈り続けて    | 雲南市教育委員会、長崎原爆資料館、長崎市永井隆記念館                      |
| 9  | 赦し難きを赦す        | 安来市加納美術館、加納佳世子、浜田市立原井小学校／クリエイティブ・ノア（吉田健二）       |
| 10 | ドコーン ドコーン      | 太田章彦、今福事務所、MASUDA KOHBOH Inc.／クリエイティブ・ノア（坂道なつ）  |
| 11 | ネット将棋          | クリエイティブ・ノア（坂道なつ）                                |
| 12 | 言葉の向こうに        | クリエイティブ・ノア（なぎさ謙二）                               |

---

## しまねの道徳 中学校

平成28年2月5日発行

発行所 島根県教育庁教育指導課

〒690-8502 島根県松江市殿町1番地



学校保管